国指定史跡　曽根遺跡群

銭瓶塚古墳

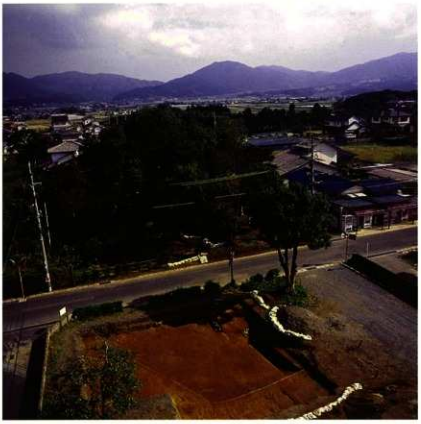
— 福岡県前原市大字曽根所在前方後円墳の発掘調査報告書 —

前原市文化財調査報告書

第 87 集

2005

前原市教育委員会



1．銭瓶塚古墳　全景（西から）

2．クビレ部（真上から）

1．家形埴輪

2．岩偶（正面から）

3．岩偶（右側面）

序　文

前原市を中心とした糸島地方は、朝鮮半島や中国大陸との交流の窓口として栄え、その繁栄の様子は中国の歴史書『魏志』倭人伝の中にも記述されています。その交流を裏付けるように、市内各地から青銅鏡をはじめとする多くの大陸系の遺物が出土しています。そして、「伊都国」後の古墳時代に入ってもこの地がいかに重要な地であったかは、前方後円墳の多さが物語っています。

今回の報告書は、国・県補助金をうけて平成15年度に発掘調査を行った国指定史跡曽根遺跡群のひとつである前方後円墳、銭瓶塚古墳の調査成果をまとめたものです。今回の調査で、新たに古墳の形態が明らかになったほか、「岩偶」など貴重な発見があり、大きな成果をあげることができました。

これらの資料が、今後、地域の歴史を解明していく上で大きな役割を果たしていくことを期待しております。

平成17年3月31日

前原市教育委員会
教育長　菊竹利嗣

例　言

1．本書は、福岡県前原市大字曽根359番地他に所在する、国指定史跡曽根遺跡群銭瓶塚古墳の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、国・県補助事業として平成15年度に実施し、平成16年度は報告書作成にあたった。
3．銭瓶塚古墳の発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体者	福岡県前原市教育委員会		
総括	前原市教育委員会	教育長	菊竹　利嗣
	前原市教育委員会	部長	久我　和彦
	前原市教育委員会文化課	課長	鬼本　武信
	同	課長補佐	中村　鉄弥
	同　文化財係	係長	岡部　裕俊
調査担当	同	主事	平尾　和久
	同	主事	牟田華代子
庶務	同　文化振興	主事	浜地　　克（平成15年度）
	同　資料館係	主事	福山　二葉
発掘調査	井上　狭衣、山崎千代子、平山富士子、江藤　晴美、柏田　睦子、藤森　啓子、和多　治子、波多江勝記		
遺物整理	川上　辰子、山崎賀代子、友池真由美、石原美恵子		

4．平成16年度の報告書作成体制は次のとおりである。

調査主体者	福岡県前原市教育委員会		
総括	前原市教育委員会	教育長	菊竹　利嗣
	前原市教育委員会	部長	久我　和彦
	前原市教育委員会文化課	課長	鬼本　武信
	同	課長補佐	中村　鉄弥
	同　文化財係	係長	岡部　裕俊
調査担当	同	主査	瓜生　秀文
	同	主事	牟田華代子
庶務	同	主事	中野　幸功
整理作業	川上　辰子、山崎賀代子、友池真由美、石原美恵子		

5．本書に使用した遺構実測図は銭瓶塚古墳の２トレンチ平面図を平尾が、他は牟田が実測し、友池真由美が製図した。
6．本書に使用した遺物実測図は円筒埴輪を山崎賀代子が、その他の遺物は山崎と牟田が行った。製図は友池、山崎が行い、復元は川上辰子が行った。
7．本書に使用した遺構写真は牟田が、空中写真は、（有）空中写真企画（代表　壇睦夫）に委託した。
8．本書に使用した遺物写真は、岩偶、家形埴輪をフォトハウスおか（代表　岡紀久夫）が、その他は牟田が撮影した。
9．本遺跡の遺物、図面は伊都国歴史博物館で管理、保管する予定である。
10．本書の執筆については牟田が行った。編集は、岡部、瓜生と協議のうえ、牟田が行った。
11．本書の執筆に際し、井上義也氏（春日市教育委員会）、小田富士雄福岡大学名誉教授、岸本圭氏（福岡県教育委員会）、西谷正九州大学名誉教授、水野正好奈良大学教授、柳沢一男宮崎大学教授、柳田康雄氏（歴史学・博士）にご教示いただいた。また、調査に際しては地権者の西原正幸氏にご協力いただいた。記して感謝いたします。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ．歴史的環境 …… 2

Ⅲ．銭瓶塚古墳の調査 …… 5
1．調査の概要 …… 5
2．調査の記録 …… 7
(1) 後円部・クビレ部の調査（1－a、bトレンチ） …… 7
(2) 前方部・周壕の調査（2トレンチ） …… 10
(3) 出土遺物 …… 12
① 円筒埴輪 …… 16
② 形象埴輪 …… 24
③ その他の遺物 …… 24

Ⅳ．まとめ …… 31
1．墳丘形態の復元 …… 31
2．古墳の築造時期 …… 32

図　版　目　次

巻頭図版

巻頭カラー１　１　銭瓶塚古墳全景（西から）
　　２　クビレ部（真上から）
巻頭カラー２　１　家形埴輪
　　２　岩偶（正面から）
　　３　岩偶（右側面）

図　版

図版１　１．銭瓶塚古墳俯瞰（西から）
　　２．銭瓶塚古墳全体（真上から）
図版２　１．１・２トレンチ（西から）
　　２．１トレンチ（真上から）
図版３　１．クビレ部（墳丘側から）
　　２．クビレ部葺石（北側周壕内から）
図版４　１．１－ａトレンチ土層断面（南壁）
　　２．１－ｂトレンチ土層断面（西壁）
図版５　１．２トレンチ全体（西から）
　　２．２トレンチ土層断面（南壁）
図版６　１．前方部葺石
　　２．前方部から後円部（西から）
図版７　１．家形埴輪（側面、正面、屋根部分）
図版８　１．岩偶（正面、背面、左側面）
　　２．１－ａトレンチ出土円筒埴輪①
図版９　１．１－ａトレンチ出土円筒埴輪②
　　２．１－ｂトレンチ出土円筒埴輪①
図版10　１．１－ｂトレンチ出土円筒埴輪②
図版11　１．円筒埴輪器面調整詳細
図版12　１．２トレンチ出土遺物
　　２．ヘラ記号付埴輪破片一括
　　３．ヘラ記号付円筒埴輪
　　４．形象埴輪片①
　　５．形象埴輪片②

挿　図　目　次

第１図　糸島地域の主要古墳と主要遺跡（1／50,000）…… 2
第２図　国指定史跡曽根遺跡群（1／2,500）…… 4
第３図　銭瓶塚古墳地形測量図（昭和56年測量）（1／450）…… 5
第４図　銭瓶塚古墳調査地点位置図（1／300）…… 6
第５図　１トレンチ遺構配置図（1／40）…… 8
第６図　１トレンチ土層図（1／30）… 9
第７図　１－ａトレンチ後円部断面図（1／30）…… 9
第８図　２トレンチ遺構配置図（1／80）…… 11
第９図　２トレンチ南壁土層図（1／30）…… 12
第10図　１－ａトレンチ出土円筒埴輪実測図①（1／4）…… 13
第11図　１－ａトレンチ出土円筒埴輪実測図②（1／4）…… 14
第12図　１－ａトレンチ出土円筒埴輪実測図③（1／4）…… 15
第13図　１－ｂトレンチ出土円筒埴輪実測図①（1／4）…… 18
第14図　１－ｂトレンチ出土円筒埴輪実測図②（1／4）…… 19
第15図　１－ｂトレンチ出土円筒埴輪実測図③（1／4）…… 21
第16図　２トレンチ出土円筒埴輪実測図（1／4）…… 22
第17図　ヘラ記号付円筒埴輪・形象埴輪実測図（1／4）…… 23
第18図　周壕出土岩偶実測図（1／2）… 25
第19図　銭瓶塚古墳墳丘想定図（1／600）…… 31

表　目　次

第１表　埴輪観察表 …… 26～30

Ⅰ．はじめに

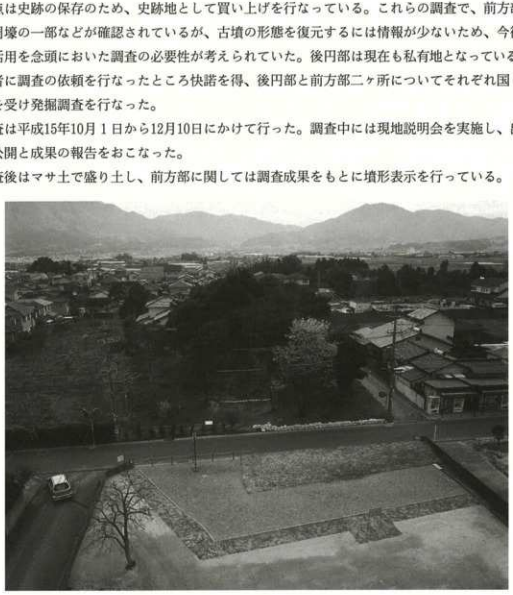
1．調査にいたる経過

銭瓶塚古墳の所在する曽根遺跡群は、弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡群で、市の南部に広がる背振山系から北に向かって派生する標高約55～65mの丘陵上に立地している。この遺跡群の調査はこれまで、昭和40年に平原遺跡が、昭和56年度には宅地造成に伴って狐塚古墳の発掘調査が行われている。これらの発掘調査によって、「伊都国」として繁栄した弥生時代終末期からその後の古墳時代にかけての首長墓が、一つの丘陵上に集中して存在するという遺跡の重要性が明らかとなり、昭和57年10月4日に現存する墳墓4ヶ所（平原遺跡、狐塚古墳、銭瓶塚古墳、ワレ塚古墳）が「曽根遺跡群」として国指定史跡となった。

銭瓶塚古墳は、これまで宅地造成に伴い、昭和58年度、昭和61年度の2回発掘調査が行われ、調査地点は史跡の保存のため、史跡地として買い上げを行なっている。これらの調査で、前方部の形態、周壕の一部などが確認されているが、古墳の形態を復元するには情報が少ないため、今後の整備や活用を念頭においた調査の必要性が考えられていた。後円部は現在も私有地となっているため、地権者に調査の依頼を行なったところ快諾を得、後円部と前方部二ヶ所についてそれぞれ国・県の補助を受け発掘調査を行なった。

調査は平成15年10月1日から12月10日にかけて行った。調査中には現地説明会を実施し、出土遺物の公開と成果の報告をおこなった。

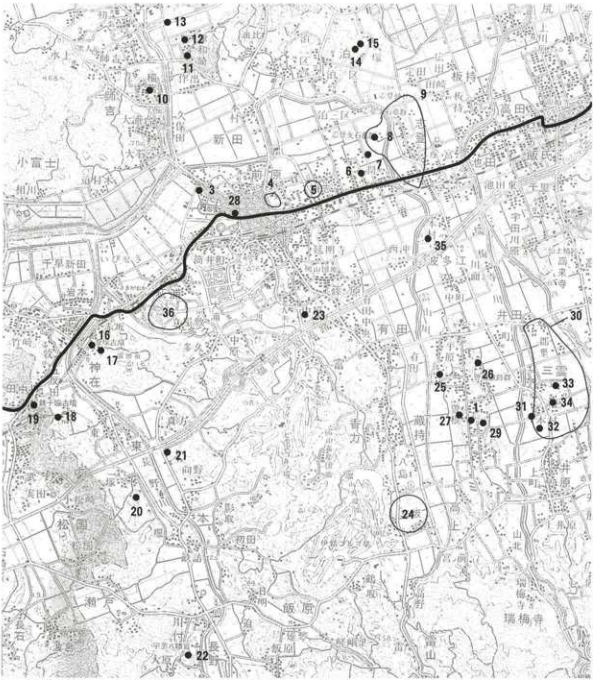
調査後はマサ土で盛り土し、前方部に関しては調査成果をもとに墳形表示を行っている。



調査後の銭瓶塚古墳全景（西から）

Ⅱ．歴史的環境

糸島地方では、玄界灘に面した旧志麻群域で11基、旧怡土群域で49基の、計60基の前方後円墳が



1．**銭瓶塚古墳**　2．唐津街道　3．前原北側古墳　4．上町向原遺跡　5．浦志遺跡群　6．潤神社古墳　7．潤地頭給遺跡　8．志登支石墓群　9．志登遺跡群　10．稲葉古墳群　11．津和崎権現古墳　12．後口古墳　13．四反田古墳　14．御道具山古墳　15．泊大塚古墳　16．釜塚古墳　17．神在横畠遺跡　18．神在藤瀬家住宅　19．一貴山銚子塚古墳　20．東二塚古墳　21．東真方A－1号墳　22．長嶽山1号墳　23．上鐘子遺跡　24．三坂七尾遺跡　25．平原遺跡　26．三雲石ヶ崎遺跡　27．ワレ塚古墳　28．前原西町遺跡　29．狐塚古墳　30．三雲・井原遺跡　31．三雲南小路遺跡　32．井原鑓溝遺跡（推定地）　33．端山古墳　34．築山古墳　35．波多江丹波守屋敷跡　36．荻浦古墳群

第1図　糸島地域の主要古墳と主要遺跡（1／50,000）

確認されており、北部九州屈指の密集度を誇る。古墳群は、今宿・周船寺域、怡土平野、長野平野などの平野単位に大別でき、さらに水系別に区分される。銭瓶塚古墳が位置する曽根遺跡群は、怡土平野の古墳群に位置付けられる。

この怡土平野には、川原川と瑞梅寺川の2河川に挟まれた三角地に弥生時代に繁栄した「伊都国」の中心集落である三雲・井原遺跡が位置しており、その集落の中心部分に4世紀代になると全長78mの端山古墳、推定全長72m以上の築山古墳、現在消滅しているが三雲茶臼塚古墳の3つの大型前方後円墳が築かれる。少し離れて南側に鋸、ヤリガンナ、鉄斧、鑿などの鉄製工具が副葬されていた井原1号墳が位置しているが、大型古墳は主に弥生時代に繁栄した「伊都国」の中心地近くに位置している傾向がある。

しかし、5世紀に入ると前方後円墳は西側の曽根丘陵へと移動する。この丘陵は、前原市の南側に連なる背振山地から北側に向かって派生する東西幅500m～600m、長さ約2.5kmの台地である。標高は約50m～60mで、丘陵上からは、遠く今津湾まで見渡せる。ここには5世紀～6世紀にかけての先山古墳（前方後円墳・消滅）、狐塚古墳（円墳）、銭瓶塚古墳（前方後円墳）、ワレ塚古墳（前方後円墳）、高上大塚古墳（前方後円墳・消滅）などの古墳群が確認されている（第2図）。このうち、銭瓶塚古墳とワレ塚古墳については、4世紀代に怡土平野でみられるような、いわゆる定形化された大型の前方後円墳とは異なり、前方部が短かく造られた墳形（帆立貝形前方後円墳）である。

首長墓が、三雲・井原遺跡周辺の平野から丘陵上へ移動した経緯は明らかではないが、同じ5世紀初頭とされる井原作出古墳は井原1号墳近くの平野内に位置しており、5世紀前葉の狐塚古墳が曽根丘陵上に位置していることから、5世紀に入ってまもなく曽根丘陵へと墓域が移っていったものと考えられる。

曽根遺跡群では、これまで弥生時代終末期の「伊都国」王墓とされる平原遺跡の他、狐塚古墳、銭瓶塚古墳の三ヶ所で調査が行なわれている。

狐塚古墳は、昭和56年度に、市教育委員会によって調査が行なわれ、初期横穴式石室を主体部とする1号主体部からは副葬品が確認されている。墳丘は葺石を持つ三段築成の円墳で、5世紀前葉と考えられる。

銭瓶塚古墳に関しては、昭和58年度に前方部の発掘調査を行なっており、5世紀中ごろの帆立貝形前方後円墳であ

ワレ塚古墳から銭瓶塚古墳を望む

ることが確認されているものの、周壕、後円部等を含めた古墳形態の全容は不明であった。

先山古墳、高上大塚古墳については、発掘調査は行なわれておらず、古墳の時期や規模に関しても不明である。高上大塚古墳については現在関西大学に保管されている鹿角製刀装具が出土遺物の可能性がある。

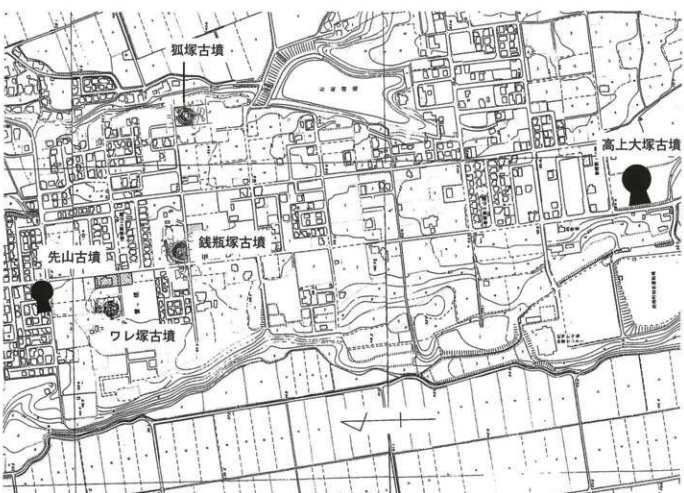
以上、曽根遺跡群の位置する怡土平野の古墳について、銚瓶塚古墳が築造される５世紀までを概観したが、弥生時代に繁栄した「伊都国」の消長とその後の歴史を考えていく上でこの曽根遺跡群は重要であり、今後も、古墳だけでなく集落域との関わり等も含め検討を行なっていかなければならない遺跡である。

（参考文献）

鍋島さとみ　1984　「曽根遺跡群Ⅲ」　前原町文化財調査報告書第14集　前原町教育委員会

林　覚　1988　「曽根遺跡群Ⅳ」　前原町文化財調査報告書第27集　前原町教育委員会

岡部裕俊・川村博編　2003　「井原1号墳」　前原市文化財調査報告書第83集　前原市教育委員会



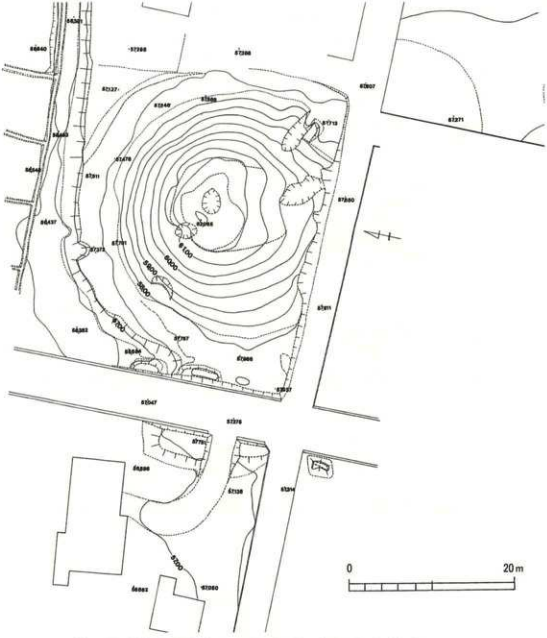
第２図　国指定史跡曽根遺跡群（1／2,500）

Ⅲ．銭瓶塚古墳の調査

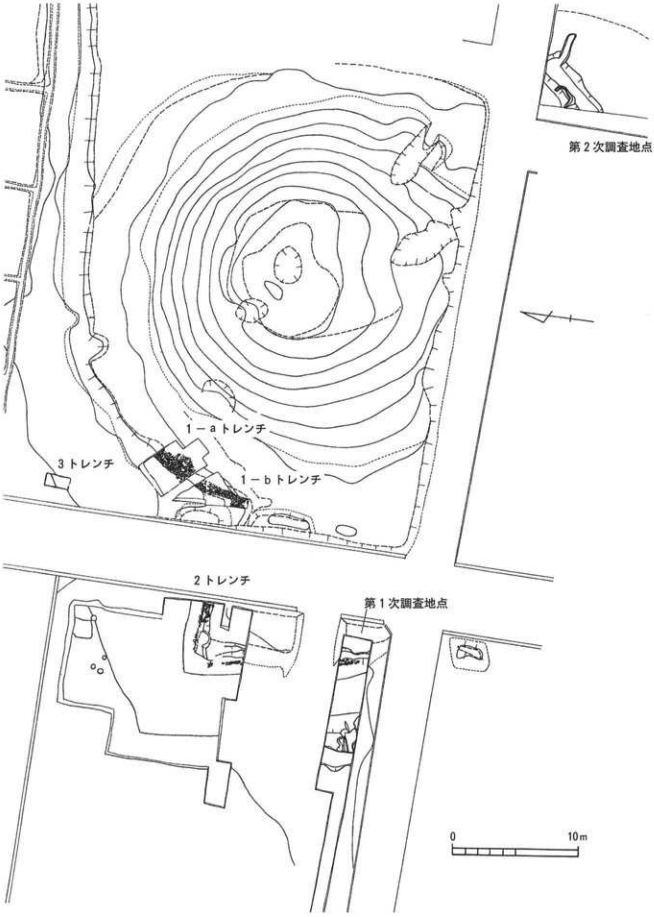
1．調査の概要

調査は、平成15年10月１日から、クビレ部検出と後円部裾部の確認を目的として１－ａトレンチの人力による掘削を開始した。その後、１－ｂトレンチを設定し、クビレ部を検出する。１－ｂトレンチについては、西壁面が主軸に直交するように設定を行なう。

次に、周壕の形態確認のため市有地内に２トレンチを設定し重機で掘削をしたところ、表土から約70㎝掘り下げたレベルで盾形にめぐる周壕のラインを確認した。周壕は、主軸に直行する幅1.2ｍのトレンチを設定し、葺石、周壕の深さを確認し、12月10日に終了した。



第３図　銭瓶塚古墳地形測量図（昭和56年測量）（1／450）



第４図　銭瓶塚古墳調査地点位置図（1／300）

2．調査の記録

銭瓶塚古墳は、南北に走る市道によって前方部が大きく破壊され、後円部南側も市道によって削られ盛土断面が露呈している状況である(第３図)。また、墳頂部には大きく陥没した痕跡があり、主体部が損傷を受けている可能性もある。以前、この墳頂部付近から家形埴輪が出土しており（巻頭カラー２)、形象埴輪を用いた祭祀を行なっていたことが想定される。

古墳墳頂部の標高は、現況で62ｍを測る。

(1) 後円部、クビレ部の調査（１－ａ・ｂトレンチ）

１－ａ・ｂトレンチ（第５図～第７図；図版２・３）

１－ａトレンチは、後円部の基底部と想定される部分に３×４ｍの長方形に設定した。その後、テラス部分へ60㎝ほど拡張するが、円筒埴輪等の痕跡はなかった。ａトレンチでクビレ部が確認されなかったため、さらに南側へ5.7ｍ、最大幅3.8ｍでｂトレンチを設定したところ、南側端でクビレ部を確認した。

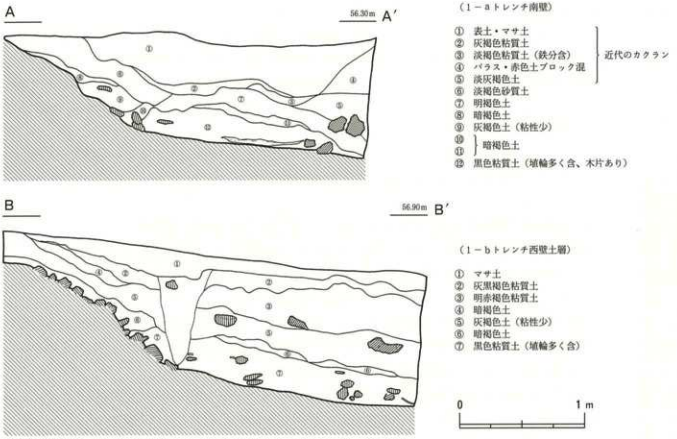
一段目のテラスは現表土を５㎝除いたところで地山の赤色ローム層検出したが、円筒埴輪列の痕跡はみられなかった。その後、層ごとに掘り下げ、現表土から約90㎝下げたところで基底石を確認した。

上層で近代の攪乱が入っていたものの葺石へ攪乱は及んでいなかったため状態は良く、基底石に関しては動いているものはなかった。葺石列は後円部で斜面幅約1.7～3.0ｍ、前方部は斜面幅2.5ｍで残っており、特にクビレ部付近は上部まで良好な状態で残存している。葺石にはこの付近で産出する結晶片岩を多く利用しており、川原石の利用は確認していない。基底石には幅約30～40㎝程の比較的大型でやや平坦な角礫を使用し、長辺が裾のラインを描くように配置されている。基底石以外は小ぶりな角礫を用いている。葺石の状態は、基底石の他、クビレ部分に向かって大変良い状態を保っていたが、一段目テラス部分に近い上面とａトレンチとｂトレンチの間のベルト付近が幅約３ｍにわたって崩落しており基底石以外は現位置保っていない。クビレ部分は縦方向に一列に平らでやや大きめの石が並べられており、配列時の基準にしたものと考えられるが他の地点ではそのような単位は確認できなかった。基底石のレベルは、クビレ部で55.68ｍ、後円部北端（１－ａトレンチ北端）で56.03ｍ。基底部のレベルはクビレ部に向け徐々に低くなっていく傾向がみられる。

後円部基底石の裾部は基本的に円弧を描くが、クビレ部に繋がる約２ｍほどは直線のラインを描いている。その直線ラインを描く基底石からクビレ部にかけて、外側に幅40～50㎝ほどの地山成形によって造られた平坦面が認められ、その外側は周壕側で一段下がる（第５図)。この地山成形部は、前方部にかけても続いて認められるが、後円部では認められなかった。平坦面上部と下部では約７～９㎝ほどのレベル差が確認された。

周壕は、基底石からなだらかに外側に向かって下がっている。周壕内埋土は、１－ａ、ｂ両トレンチ断面で確認できた最下層の黒色粘質土層と、その上層に粘性の少ない暗褐色土層である（第６図)。この２つの層から円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土しており、それ以外の層からはほとんど出土していない。特に最下層の黒色粘質土層から接合可能な埴輪片が多く出土しており、葺石にかからない下層で堆積していることから、古墳が造られ墳丘に立て並べられていた円筒埴輪が崩壊するま

第5図　1トレンチ遺構配置図（1／40）

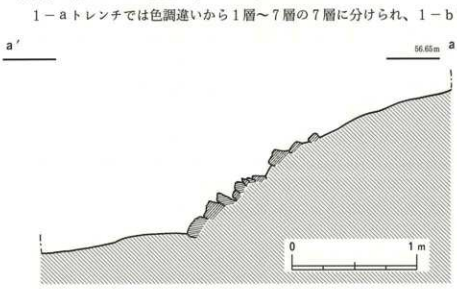


第6図　1トレンチ土層図（1／30）

での比較的早い段階での埋土と考えられる。この層の地山面から2～3センチ高いレベルで岩偶が出土している。岩偶は1－aトレンチの南西端で出土したが、出土した当初は墳丘側より転落した葺石片と思い取上げてしまったため、正確な出土地点を図示できなかった。

この層からは多くの木片が出土しており、水はけの悪い地山の土質から、雨の後などはある一定期間水が溜まっていた状況が考えられる。

1－aトレンチでは色調違いから1層～7層の7層に分けられ、1－bトレンチの土層では1～5層に相当する。色調は土層図に示したとおりだが、崩落してきた葺石と埴輪片をやや含む。1－aトレンチでは1～5層は近・現代の攪乱が入る。この上層部からの出土遺物として、1－aトレンチの一段目テラスに近い場所で形象埴輪片（第17図－105）が出土し



第7図　1－aトレンチ後円部断面図（1／30）

ている。

クビレ部の土層断面（1－bトレンチ）では前方部の葺石がよい状態で検出している。葺石上面と基底石のレベル差は80㎝あり、斜面幅1.35m、垂直幅1.1mo。動いている葺石はなく、傾斜のやや急な基底石から中断までは高さのない平坦な石を重ねていく葺き方で、上半部はやや傾斜がゆるくなり、礫の平坦面を傾斜面に貼り付けていく葺き方である。この上半部にかけての傾斜角度の違いは後円部でも確認される。

1トレンチで検出した基底石の描く円弧から、後円部の直径は約36mで、クビレ部が確定したことから、前方部長12.3mの前方後円墳であることが確認された。

(2) 前方部・周壕の調査（2トレンチ）（第8図・第9図；図版5・6）

前方部の調査は、前述のように、昭和58年にトレンチ調査を行いその形態については確認されていた。今回は、前回の調査区を含むかたちでさらに北側を広げ、周壕の形態と幅、深さなどの確認を目的として南北幅13m、東西幅11.6mの調査区を設定した。

遺構面は現表土から、約80㎝下で赤色ローム層の地山を確認した。調査は、保存が目的であるため周壕の形態は平面での確認にとどめ、周壕の断面形態確認のため旧調査区を含む位置で主軸に平行する幅1.2mのトレンチ内のみ掘り下げをおこなった。

前方部は以前の調査で確認されているとおり、北側コーナー部分が葺石がない状態であった。また、前方部墳丘部分も後世の削平や攪乱が入り保存状態は悪い。現況で、一番残りの良いトレンチ北東部で、前方部墳丘上レベルが57.35m、葺石下55.47mで、約1.9mの高さで墳丘が残存している。前方部の葺石は、基底石から2、3段ほどしか残存しておらず、後円部に比べると葺石全体が小ぶりなものが多いため崩落しやすかったことが考えられる。葺石の残存している幅は、垂直幅で50㎝程度であるが、本来はクビレ部付近の前方部葺石の残存からみるとさらに1.0mほど存在していた可能性がある。1トレンチのクビレ部と墳丘の残存状態から、前方部は一段築成部までしか確認できない。

基底石裾のレベルを見てみると、クビレ部で55.68m、前方部右端部55.40m、前面55.48mであることから、クビレ部から前方部にかけて徐々に低くなっている。

クビレ部でも確認された基底石から外側に向かう平坦部は、平面では外側に向かってやや傾斜しながら約80㎝の高まりが確認されている（第8図）。また、前回の調査時の土層断面をみると、葺石裾から50～70㎝ほどのやや外側へ傾斜している面がある。この地山成形の傾斜面裾までが墳丘と捉えると、前方部の長さは12.3mに復元できる。

周壕の平面形態は、今回の調査で従来考えられていた墳丘と相似形「鍵形」に巡る形態ではなく、「盾形」に巡る形態と確認された。

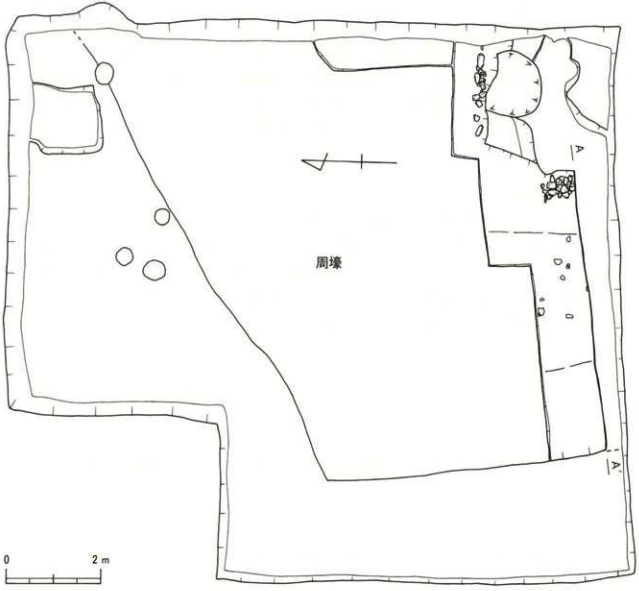
周壕の幅は、主軸方向で4.6m、深さ60㎝、断面形態は緩やかな逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。周壕は、主軸に直行する南北方向で6.6m検出し、それから北東方向へ約110度開いて墳丘を囲むかたちで巡っている。

周壕底面平坦部の長さは2.8mである。底面から周壕外側へはなだらかに上がっていき、周壕の外側のレベルは葺石裾部のレベルより60㎝ほど高くなっている。周壕最下層のレベルは、55.3mである。埋土の状況は、後円部やクビレ部と同じ状況を示しており、大きく分けると最下層に黒色粘

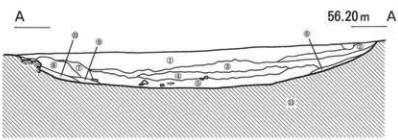
質土、その上層に暗褐色土層がややレンズ状に堆積しているが、一部墳丘側から流れ込んできた層（第７～10層）が葺石上層に堆積していた。遺物は、後円部に比べるときわめて少なく、最下層の黒色粘質土と葺石上層（７～10層）から集中して出土している。崩落してきた葺石も出土数としては少ない。

出土遺物は、すべて周壕埋土から出土しており、ほとんどが円筒埴輪で、１点だけ、朝顔形埴輪の小片が含まれている。

２トレンチで確認された周壕の北東方向への延長方向を確認するために、１トレンチ北側に１×２ｍの長さで３トレンチを設定した。このトレンチでは、現表土から40㎝のレベルで遺構面を検出した。検出面の地山は赤色ローム層で、周壕埋土表面は暗褐色土層が堆積していた。検出面のレベルは55.5ｍである。周壕は２トレンチで確認された延長方向にほぼ沿う形で確認された。このライ



第８図　２トレンチ遺構配置図（1／80）



第９図　２トレンチ南壁土層図（1／30）

ンを結んだ北側の周壕形態を南側に反転させて復元すると（第19図）、後円部での最大幅50.4ｍ、古墳全長62.1ｍの帆立貝形前方後円墳に復元できる。

３トレンチは、２トレンチと同じく、遺構の保全のために平面での確認のみで、遺構実測と写真撮影を行い、埋め戻しをおこなった。

(3)　出土遺物

調査区からは、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、岩偶が出土している。原位置を保っていた遺物はなく、すべて周壕内、あるいは葺石上へ転落した状態で出土している。出土地点は、１トレンチのクビレ部に集中している。また、ヘラ記号をもつ円筒埴輪片（第17図）はクビレ部・後円部からの出土、形象埴輪片は、後円部（１－ａトレンチ）からのみの出土である。

また、１－ａ、１－ｂ両トレンチから出土した埴輪は調査区が近接しているため接合したものもあり、すべて１－ａトレンチ内でまとめて報告する。

出土埴輪概要

各トレンチから出土した埴輪は、焼成状況から大きく２タイプに分けられる。

明赤褐色を呈し、器壁がやや厚く堅牢な埴輪と、黄褐色を呈し、器壁が薄く焼きがあまい埴輪の２タイプである。しかし、この差異が、製作技法や製作者等の違いによるものかは、現段階では判断できない。また、表面に顔料等が塗布されているものは確認できなかった。

以下、円筒埴輪の各特徴を概説した後、各個体について、後円部・クビレ部（１－ａ、ｂトレンチ）、前方部（２トレンチ）の順に記述する。

遺物に関しては、これまで銭瓶塚古墳から出土した埴輪の報告数が少ないことから、実測可能な個体をすべて載せている。紙面の都合上、各個体の詳細に関しては観察表にまとめている。

焼成

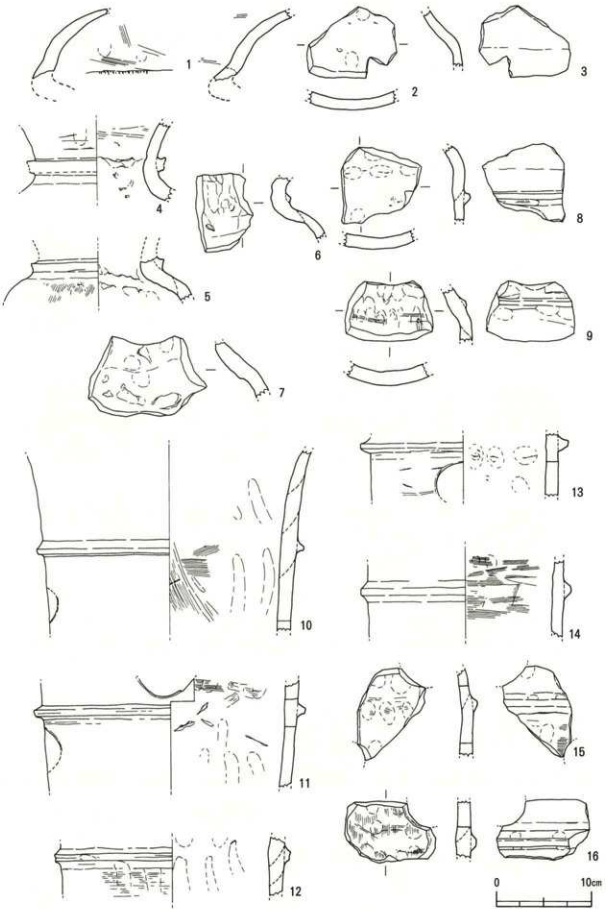
焼成は前述のように堅牢なものと不良なものとに、大別される。また、全体を通して黒斑を持つもの、および須恵質のものはみられない。

色調

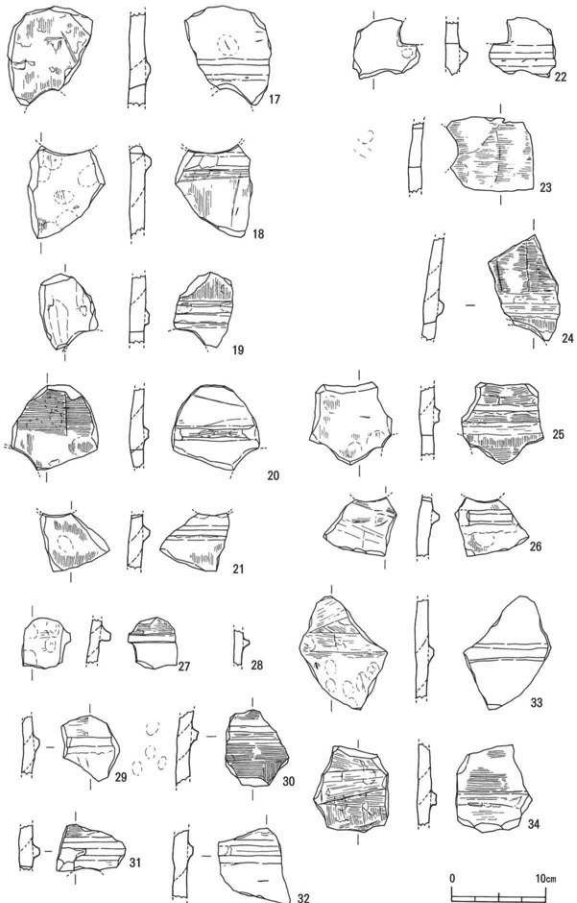
明赤褐色と黄褐色に大別されるが、細かく見るとその中でも、明赤褐色系（橙色、明褐色）、黄褐色系（黄橙色、明黄褐色）などに分けられる（観察表参照）。

胎土

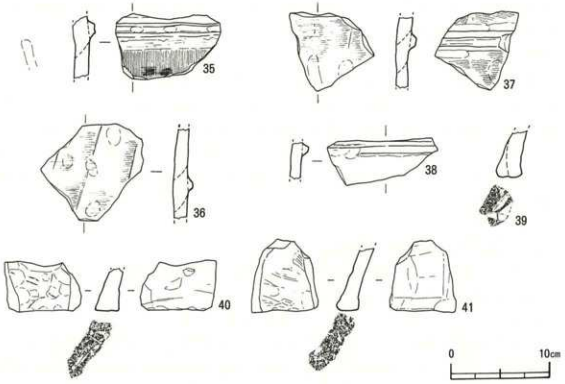
長石、石英、金雲母などの１～３㎜大の粒子を含むものが多い。中には白色粒子、赤色粒子など



第10図　1－aトレンチ出土円筒埴輪実測図①（1／4）



第11図　1－aトレンチ出土円筒埴輪実測図②（1／4）



第12図　1－aトレンチ出土円筒埴輪実測図③（1／4）

が混入したものもある。黄褐色系の焼成がやや不良なグループは、精緻な胎土のものが多く見られた。

調整技法

外面調整の口縁部は、ヨコナデをおこなう。胴部は指押さえの後、タテハケを施して終了しているものが多く、二次調整としてヨコハケがみられる個体は約1割強である。ハケ工具は幅1.4㎝幅の狭いもの、2㎝のものなど数種類あるが、全体的に丁寧に調整を行なっている印象である。突帯部分は、工具原体の幅が狭い（0.5㎝～1.0㎝未満）板状工具によるヨコナデによって、貼り付けている。この突帯貼り付けは、タテハケを施した後に行なわれている。

内面調整は、2割程度が横、および縦方向のハケ調整で、残り8割が、板ナデや指おさえなどのナデが最終調整としてみられる。

透孔

円形透孔がほとんどだが、図面番号22（1－aトレンチ）、75（1－bトレンチ）については角があり、円形ではない透孔の可能性も考えられる。

口縁部

口縁部は端部が残っているものが全部で10点出土している。このうち、朝顔形埴輪が5点、残りが円筒埴輪である。円筒埴輪の先端部のみで外反するものはなく、直に立ちあがるもの、底部から外側に広がるものがあり、一点のみやや内傾するものがある。

突帯

突帯のタイプは細くて（貼り付け部分で幅1.5～2.0㎝程度）高さのあるタイプ、高さがないタイプ、幅が広く（幅2.0㎝以上）高さがあるタイプ、ないタイプの4タイプに分けられる。断面形態

は、磨耗していない分はすべて台形か方形を呈している。突帯の幅が細く、高さが0.5～0.9㎝ほどあるタイプが大半を占める。

形状

円筒埴輪の胴径は最小で20.7㎝、最大で32㎝の胴部径の差が有り、大型、小型のものがある。胴径25～28㎝のものが多い。口縁部から基底部まで残存している個体が出土していないため、器高は不明である。全体的なフォルムも、底部から直線的に立ちあがるタイプが大半だが、底部からラッパ上に開くタイプ（101）もある。突帯は最大で２条しか残存していない。突帯の間隔は、直線的に立ちあがるタイプは7.2㎝と7.6㎝で、ラッパ状に開くタイプは9.5㎝と、フォルムによって突帯間隔は大きく異なる。

①　円筒埴輪（第10図～第16図；図版８～11）

出土した埴輪は、形象埴輪２点を除く他は円筒埴輪と朝顔形埴輪である。

出土地点毎に各個別の説明を行なっていく。

後円部出土（１－ａトレンチ）（第10図～第12図；図版８・９）

１～９は朝顔形埴輪である。周壕、および周壕埋土からの出土で、軟質、黄褐色系のグループに属する。調整と、胎土の状況から、１と８は同じ個体である可能性が高いが、残りの７個体は別個体と考えられる。

１は、口縁下部から頸部付近にかけての個体で、どちらとも摩滅が激しいが、外面にタテハケが残り、頸部とのつなぎ目に突帯の外れた痕跡がある。

２も内面に横方向の粗いハケ目が残る。

３は、肩部で表面の磨耗が激しく焼成があまい。器壁の厚さや金雲母や白色粒子を含む胎土の状態から８と同一個体である可能性が高い。

４は頸部径が約13㎝で、表面は摩滅、内面は頸部と胴部のつなぎ目に当たる部分に工具痕が明瞭に残る。口縁部にかけては粗いヨコハケが残る。突帯は一部分しか残存していないが、つまみあげた高さのある断面台形を呈している。

５は、頸部から肩部で、外面は指押さえ後タテハケ、内面は頸部につなぎ目と思われる痕跡が残る。

６も頸部の小片で、表面の調整は摩滅が激しいが、内面は指押さえ痕が残る。頸部突帯は欠けているため原形をとどめていない。

７、８も肩部および胴部にかけての破片で、表面は摩滅、内面は指押さえ痕が残る。８の突帯は細く高さのある突帯である。

９は、肩部で、表面、内面ともに指押さえと板ヨコナデがみられる。頸部突帯は細く高さが低い。

10から41までは円筒埴輪である。

10は、円筒埴輪の口縁部から一段目の突帯部分と考えられる。口縁部分のみがラッパ状に外反する。器壁は、分厚く1.6㎝で、１条目の突帯下に推定直径約3.8㎝ほどの円形の透孔がある。表面調整は摩滅しており、内面調整は指押さえの他、突帯裏面はヨコハケが認められる。細く高さのある突帯をもつ。

11は、胴部で突帯を挟んで二ヶ所に円形透孔が入る。透孔の位置から一段には二方透孔である可能性が強い。10と胎土、色調、焼成等が似ており同一個体の可能性がある。10、11ともに大型の円筒埴輪である。

12～14は、胴部の破片で小型の円筒埴輪に入る。12、14の突帯は幅広で高さが低く、13の突帯は幅広で高さが高い。

15～38までは円筒埴輪の胴部で径が測れない個体である。透孔があるものが、15～26で、22以外は円形の透孔と考えられる。22は下方が方形の透孔であった可能性もある。

器面調整でタテハケの後の二次調整としてヨコハケが観察できるのは23～25の３点である。

23は、焼成があまく、表面は摩滅しているが、わずかに細かいヨコハケが観察できる。

24は、突帯上面は細かいヨコハケ調整が行なわれているが、下面はタテハケ調整で終了している。

25は、内面はタテハケのあと、指でナデており、外面は突帯の上面は粗いヨコハケ、下面は細かいタテハケの後ヨコハケによる最終調整を行なっている。

39～41は基底部だが、ともに小片のため径を出せなかった。３点とも、底面に木の枝状の小さな圧痕や棒状の圧痕が明瞭に残る。また、上面へは外側へ開きながら立ちあがる形状を呈している。

クビレ部出土（１－ｂトレンチ）（第13図～第15図；図版９・10）

１－ｂトレンチは今回の調査区で最も出土遺物の多かった調査地点である。

口縁部は７点出土しており、うち42～44までの３点が円筒埴輪の口縁で、45～49が朝顔形埴輪の口縁部である。

42は、ラッパ状に外反する口縁部をもち、口縁端部は指おさえの後、板状工具によるヨコナデ、その他は指おさえの後タテハケがみられる。内面は、指おさえ後斜め横方向の板状工具によるナデ。下部は突帯を貼り付けた痕跡が見えるため、ここに一段目の突帯がくるものとおもわれる。口縁径26.6㎝で、一段目突帯部分での径は22㎝である。さらに基底部に向けてすぼまる形をしているため、小型のタイプの円筒埴輪に入ると思われる。

43は、直線的に立ちあがるタイプの円筒埴輪の口縁と考えられる。口縁端部は強いヨコナデで、それ以下は細いタテハケがみられる。

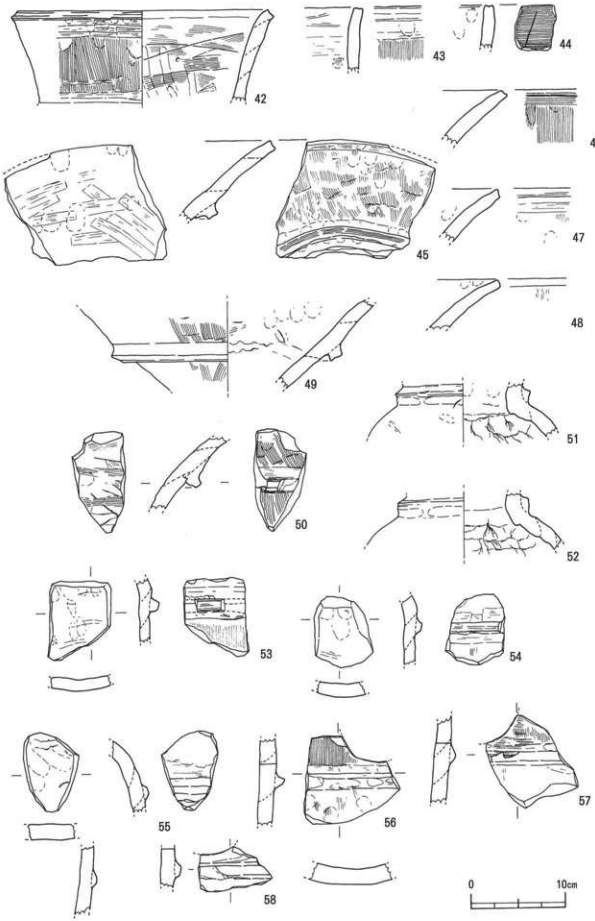
44は、口縁端部がやや内傾している。口縁部端部まで細かいヨコハケがみられる。

45は、朝顔形埴輪の口縁部で、外面口縁端部はヨコナデとヨコハケがみられ、その下方は突帯から口縁部に向かって、タテハケが見られる。口縁径は破片が小さいため明確ではないが、復元で27㎝くらいと思われる。

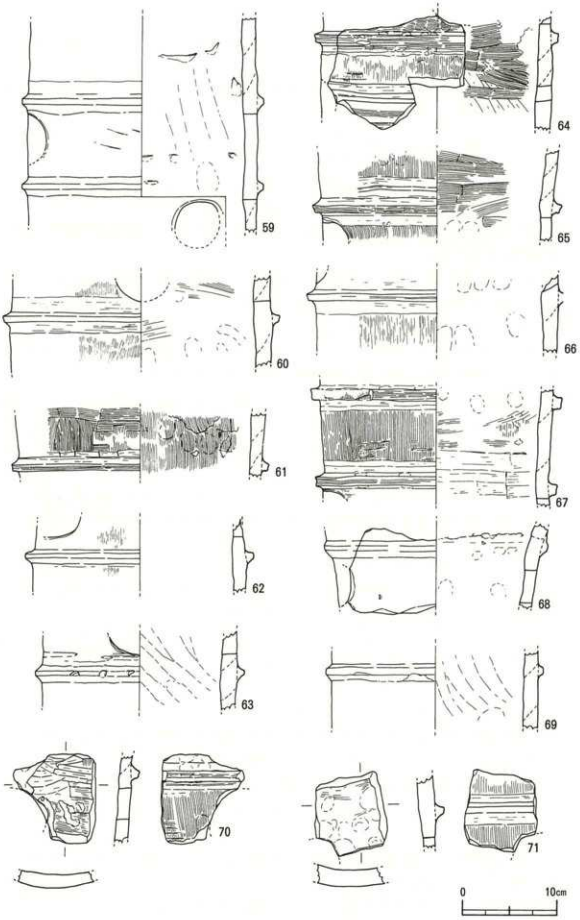
46は、口縁端部はタテハケ後ヨコハケで、その他は指おさえタテハケがみられる。口縁端部はやや細くなる。

47は、口縁端部はヨコナデがみられ、その他は指おさえの後タテハケがみえるが明瞭ではない。口縁端部はやや細くなる。

49は、口縁端部が欠損している朝顔形埴輪の口縁部である。推定口縁径32㎝、頸部12.3㎝。突帯は、貼り付け部分にあたりをつけたと思われる沈線が施されている。外面は下から上方向のタテハケ、内面には突帯部分に粘土の貼り付け痕のシワがみられる。器壁は厚い。



第13図　1－bトレンチ出土円筒埴輪実測図①（1／4）



第14図　1－bトレンチ出土円筒埴輪実測図②（1／4）

50は、朝顔形埴輪の口縁部突帯で、外面は下から上方向のタテハケがみられ、内面は突帯裏面にあたる部分にヨコハケが施されている。

51～55は朝顔形埴輪の肩部にあたる。51と52は明瞭な接点はなかったものの、色調、胎土などから同一個体の可能性がある。

51は、頸径12cmで、頸部に断面三角形の突帯を貼り付けている。内面にしぼり痕がのこる。

53、54は、朝顔形埴輪の肩部で、外面はタテハケが施されている。

55も朝顔形埴輪の肩部で、突帯は幅が広く、断面形態は扁平な台形をしている。

56～58は、円筒埴輪の胴部で、円形、および楕円形の透孔をもつ。

59～69は透孔がある円筒埴輪の胴部である。68を除いてはすべて、基底部から直線的に立ちあがる形態と考えられる。

59は、一番残りがよい破片で、基底部から口縁部へかけて直線的な形態をしている。表面は摩滅している。器壁の厚さは1.6cm、突帯は断面台形を呈しており、突帯間の間隔は7.2cmである。胴部径は24.4cm、透孔の復元直径は5.5cm。

60は、円形透孔をもち、外面はタテハケ、内面は指押さえ後、斜め方向のハケ、ナデ消しを行なっている。器壁は厚く、細い突帯が貼り付けられている。胴径27.6cm。

61は、焼成がよく器面調整が良く残っている。外面はタテハケ後ヨコハケ調整、そして一部その後もう一度タテハケを施している。突帯貼り付け部については、幅0.6cm程度の工具でヨコナデを行なっており、内面は全面タテハケを施している。工具原体の幅は1.4cmである。胴径26.7cmである。

62は、やや小振りの円筒埴輪で、外面にうすくタテハケが残る。胴径23.6cm、器壁は薄い。

63も小振りの円筒埴輪で、胴径20.7cmである。突帯に刻み目のようにヘラ状工具で押さえた痕がある。突帯上面にヘラ状工具によるヨコナデがみられる。

64は、上下二ヶ所に円形透孔がみられる。焼成がよく調整が良く残る。表面はタテハケの後板状工具によるヨコナデ、突帯付近は板状工具によるヨコナデ。内面はケズリ後、原体サイズ1cmの工具でヨコハケが施されている。胴径24.6cm、器壁は厚い。

65は、表面タテハケ後突帯付近を板状工具によるヨコナデがみられ、内面は指押さえ後、原体サイズ1.1cmのヨコハケが施されている。胴径25.6cm、器壁の厚さは薄い。

66の表面調整は、突帯付近はヨコナデ、他は薄くタテハケが残る。胴径25.6cm。

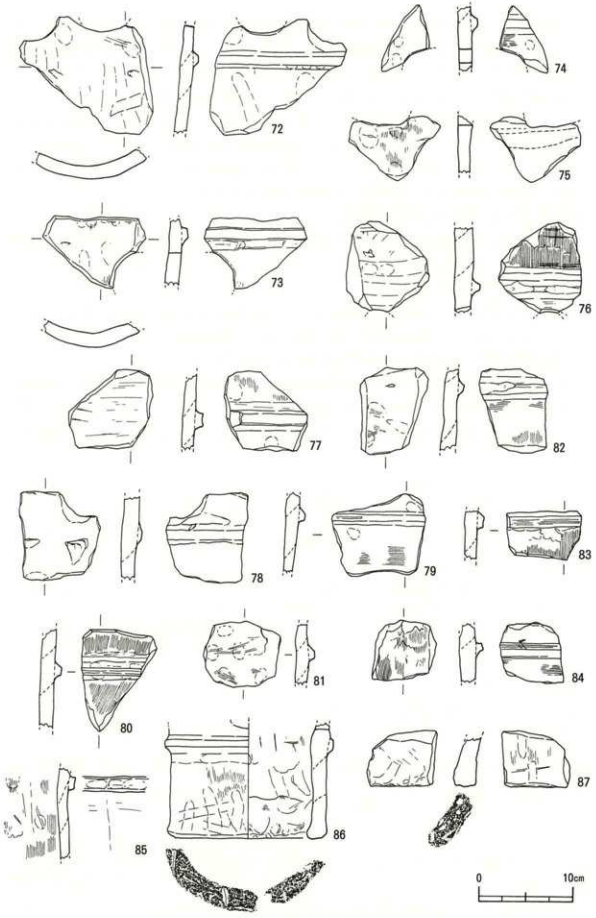
67の表面調整は、突帯付近は0.5cmほどの幅のヨコナデがみられ、その他はタテハケを施している。突帯が剥がれている所から、タテハケを行なった後に突帯を貼り付けていることがわかる。内面調整は指押さえ後ヨコハケが施されている。突帯間の間隔は7.5cm、胴径24.8cmである。

68は、表面の摩滅が激しく詳細は不明。胴径23.8cmである。

69は、表面の摩滅が激しく、内面の指押さえ痕のみ確認できる。胴径22cmの小型の円筒埴輪である。

70～76は透孔を持つ円筒埴輪胴部片である。75の透孔は角があり円形透孔でない可能性があるが、他はすべて円形透孔である。

70は、透孔を作る際に一度弧を描き、その後訂正を行なった痕跡が残る。表面にはタテハケが残り、内面は0.5cm程度の工具による板ナデがみられる。



第15図　1－bトレンチ出土円筒埴輪実測図（1／4）

71は、透孔端部がやや角張っているため、円形でない可能性もある。

77～85は、突帯部分の円筒埴輪胴部片である。突帯の形態は、77、83、85などは断面形態が四角形をしており、幅も広い。その他は、断面台形のものでやや高さがひくい形態である。

86、87は基底部で、86に関しては一番残りが良く、基底部の半分が残存している。

86は、底径17cmの小型の円筒埴輪である。内面には粘土帯のつなぎ目が残り、5cm幅の粘土紐を重ねて積み上げていった様子が観察できる。基底部付近は強い指押さえによって成形されている。底部から突帯までの間隔は9.5cmである。突帯は低い逆台形を呈している。基底部から二段目に円形の透孔が施されている。底面には数本の棒状圧痕が残る。

前方部（2トレンチ）（第16図；図版12）

前方部からは、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。出土地点はすべて周壕内からで、遺物量は後円部、クビレ部に比べると少ない。

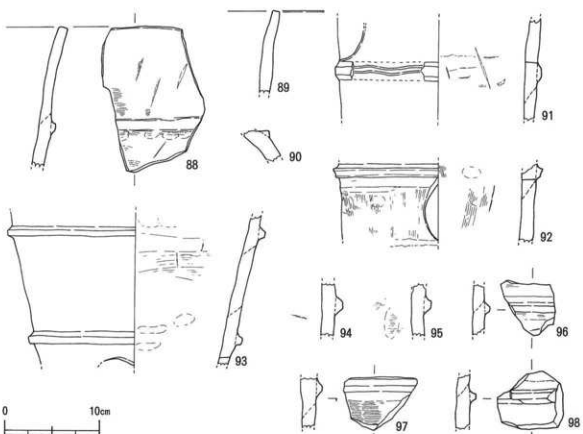
88、89は、円筒埴輪の口縁部である。

88は、器壁が薄く、1.2cmほどで、焼成はあまい。表面調整は、幅2.0cmほどの工具による粗いヨコハケがみられる。突帯周辺は指押さえ痕がのこる。内面は摩滅している。

90は朝顔形埴輪の肩部である。三角突帯を頸部に貼り付けている。

91～93は、円形透孔を有する円筒埴輪の胴部である。99と100は、口縁部にかけて直に立ち上がるが、101は、口縁部に向けてラッパ上に広がる。

91は、表面が摩滅しており調整は不明。円形透孔が突帯のすぐ上に施されている。突帯のはが



第16図　2トレンチ出土円筒埴輪実測図（1／4）

れた後に、貼り付ける際のあたりの線としての凹線がみられる。突帯は扁平な台形である。

92は、表面は粗いタテハケがみられ、内面も指押さえの後粗いタテハケの調整を行なっている。突帯のすぐ下に円形透孔が施されている。

93は、表面は摩滅しているが、内面は粗いヨコハケが残っている。突帯間の間隔は9.5㎝で、その他の円筒埴輪の突帯間間隔（59、67）に比べると、2㎝ほど広い。細くて高さのある断面台形状の突帯を施している。胴径からすると、円形透孔が入っている段が二段目ぐらいにあたると考えられる。

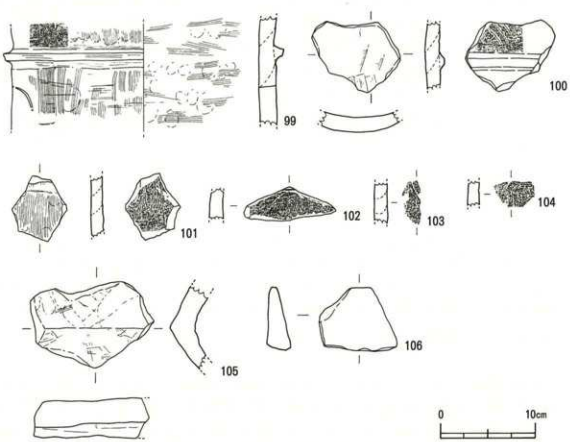
94～98は、円筒埴輪の胴部で、ともにやや小さめの断面台形の突帯をもつ。

97は、表面の調整として粗いヨコハケが施されている。

・ヘラ記号付円筒埴輪（第17図－99～104；図版12）

銭瓶塚古墳からは、これまでの調査でも渦巻文様と×印の「ヘラ記号」が施された円筒埴輪が前方部から4点出土している。今回、ヘラ記号が施されていた破片6点は、全て後円部とクビレ部から出土しており、円筒埴輪の胴部と考えられる。いずれも鋭い工具によって施されている。ヘラ記号の種類は、これまで出土している渦巻文様の記号と同様と思われるものが、99、101、104の3点である。100、102は、これまで銭瓶塚古墳で確認されていないヘラ記号である。103は破片が小さいため文様の詳細は不明である。

99は、円筒埴輪の胴部で円形透孔を持つ。ヘラ記号は突帯上0.7㎝のところに認められ、大半



第17図　ヘラ記号付円筒埴輪・形象埴輪実測図（1／4）

を欠損しているがこれまで出土している渦巻記号に近似している。器面調整は、指押さえ後に細かいタテハケを施し、その後板状工具で横方向にナデた痕跡が残る。内面は指押さえの後、やや粗いヨコハケ、ナデ消しを行なっている。

100は、突帯の0.9㎝上に、長さ2.2㎝程度で斜めに平行に並ぶ三本のヘラ記号がみられる。器面調整は突帯付近に横方向の板ナデ痕が残るがその他は摩滅している。内面は横方向と縦方向の板ナデが残る。

101のヘラ記号は、やや楕円を描く３本の円弧が見られる。このヘラ記号の0.8㎝下には突帯貼り付け時のヨコナデが見られるため、他と同様に、胴部突帯に近い部分に施されたと思われる。

102は、破片上端部に突帯が外れた痕跡が残ることから、突帯の直下に施されており、直線と斜めの線によって構成されている。外面横方向の板ナデ、内面は指押さえのあと、板ナデがみられる。器壁がやや厚く、1.6㎝である。

103は、4.5×2.0㎝の小片に直線の線刻が認められる。

104は、4.2×2.7㎝の小片に渦巻文様かと考えられるヘラ記号が認められる。

②　形象埴輪（第17図－94・95；巻頭図版２、図版12）

銭瓶塚古墳では、墳頂部から出土したとされる家形埴輪（巻頭図版２）が伊都国歴史博物館に収蔵されているが、昭和58年度の調査でも前方部から動物埴輪の脚部と思われる破片が出土しており、墳丘上の円筒埴輪と共に形象埴輪が立てられていたことが想定される。

今回の調査ではクビレ部に近い後円部（１トレンチ）から、形象埴輪片が２点出土している。

105は、1－ａトレンチの一段目テラス部分に近い葺石上の表土から出土した。破片の大きさは12.5×９㎝で、くの字状に屈曲し稜線が入る。調整は、表面には指押さえが明瞭に認められ、一部粗いヨコハケがみられる。裏面は指ナデと指押さえが認められる。平面図左側面は、欠損していない。家形埴輪の一部である可能性がある。

106は、6.7×8.3㎝の破片で、上面端が生きている。形象埴輪の一部と思われるが詳細は不明である。

③　その他の遺物

岩偶（第18図；巻頭図版２、図版８）

クビレ部に近い後円部周壕内（１－ａトレンチ）の黒色粘質土層から出土した、結晶片岩製の岩偶である。背面、および、肩部以下は欠損しており、残存長10.3㎝である。棒状の礫の表面を面取りして成形しており、頸部にあたる部分は抉りを入れている。頸部に残る工具痕から鉄製の工具を使用した可能性が高い。顔の部分は一段高く浮き彫りになっており、目、鼻（欠損）、口、耳、眉（？）の表現が認められる。目の下から、口の左半分にかけて、表面が0.4㎜ほど欠損している。

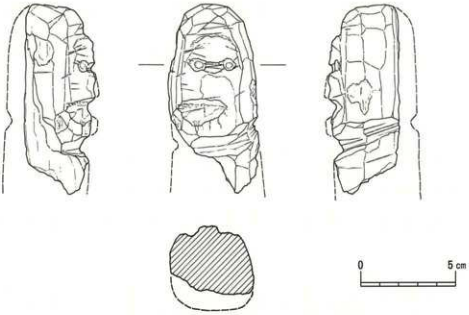
目は、断面が丸い棒状の工具を回転させながら成形した痕跡が残る。右目は1.0×0.6㎝、左目は0.7×0.6㎝の大きさに作られている。目と目の間には溝が彫られており、眉間に皺を寄せた表現を意図して彫られたものと思われる。また、眉と思われる線刻が両目の上に刻まれているが、これに似た工具痕が他にいくつか認められるため意図して表現されたものか断定できない。鼻は

浮き彫りによって作られていた可能性があるが、欠損している。口は開いており、その中に歯を表現したと思われる小さな刻みが、上の歯部分に７ヵ所確認できる。一部表面が欠損しているが現況で2.8×1.5㎝である。耳は、顔の左側面に打ち欠いて窪みをつくることで表現している。

顔の部分の長さ7.2㎝、幅4.8㎝、現況の厚み3.8㎝である。

石材は、風化変色し黄褐色を呈している。結晶片岩は、節理に沿って剥離しやすく加工には適していない。表面が風化していることで加工しやすくなった石材を選んで使用したと考えられる。

石製埴輪（石人）は、石人山古墳など九州各地の古墳で見られる。今回出土した岩偶は出土状況は、石製埴輪と似ているものの、顔の表現方法、大きさ、造形などに、異なる点が認められる。棒状を呈していることや多くの円筒埴輪等と共に周壕から出土していることから本来は円筒埴輪と同様に墳丘に立てられていた可能性も考えられる。また、眉間に皺を寄せ、歯をむき出した表情から「威嚇」の表情を表現したものと思われる。この「歯をむき出す」埴輪は、群馬県山名原ⅡⅡ遺跡からも出土しており、武人埴輪等と同様に「辟邪」の意味で作られた可能性も考えられる。今後、このような岩偶の出土例を待ってその意義等について検討していきたい。



第18図　周壕出土岩偶実測図（1／2）

第１表　　埴輪観察表

図面番号	出土位置	種　別	部　位	現部（cm）	突帯（cm）		胴部径（cm）	底部（cm）	胎　　土	色　調	焼　成	備　　考
					巾	高さ						
１－ヨトレンチ												
1	周堤	朝顔形	口縁下部		－	－		－	精緻、1～2㎜大の石英・長石粒を若干含む	明黄褐色	やや軟	裏面マメツが著しいがわずかにタテハケ痕有り。ヨコ、斜めのハケ痕も部分的に有り。
2	周堤	朝顔形	口縁下部		－	－		－	精緻、微粒の石英・長石粒が若干含まれる。1～3㎜大のものもある。	黄橙色	やや軟	表面に若干粗いハケ目が部分的に見られる。
3	周堤	朝顔形	肩部		－	－		－	細かく緻密、微粒の金雲母、白色粒を若干含む	明黄褐色	やや軟	表面に指おさえ痕、何かの工具かと思われる痕がある。
4	周堤	朝顔形	頸部	13.0	1.8	0.7		1.7	緻密、微粒の白色粒子と金雲母を若干含む	明黄褐色		裏面に工具痕らしき穴、ヨコハケ痕有り。
5	周堤	朝顔形	頸部	14.0	1.5	0.6		1.4	微粒の金雲母若干あり。1～2㎜大の石英・長石、角閃石含む	明黄褐色	普通	表面マメツが著しいが指おさえの後タテハケ痕。裏面に粘土のしわより有り
6	周堤理土	朝顔形	頸部		1.1	0.4		1.5	案外細かい。1～2㎜大の石英・長石粒を若干含む。	明赤褐色	普通	表面に指おさえ痕、棒状の工具を突きさした様な痕。斜め方向に板状工具の端痕有り
7	周堤	朝顔形	肩部						精緻、微粒の白色粒、金雲母を若干含む。	明黄褐色	軟	表面はマメツしている。裏面はナデている。
8	周堤	朝顔形	肩部		1.5	0.6		1.2	細かく緻密、微粒の金雲母、白色粒を若干含む	明褐色	やや軟	表面はマメツしているが指おさえ痕有り。裏面はナデているかマメツ。
9	周堤	朝顔形	肩部		1.3	0.4		1.2	1～2㎜大の石英・長石粒を多く含む。微粒の金雲母若干有り。	明黄褐色	やや軟	表面指おさえから板ヨコナデしたよう。ヘラ先のようなものでおさえた痕。
10	周堤	円筒	胴部		1.8	0.7	32.0	1.6	粗くザラついている。1～4㎜大の石英・長石粒が多く、微粒の金雲母、4㎜大の赤色粒若干有り	橙色	普通	円形の透孔有り。表面マメツが著しい。裏面、凹線気味の工具痕有り。
11	周堤	円筒	胴部		1.5	0.9	27.6	1.3	ザラつき、粉っぽい。1～2㎜大の石英・長石粒含む。1～3㎜大の赤色～茶色粒も若干有り。	橙色	やや軟か？	円形状の透孔有り。表面はマメツ。裏面は指おさえの後ヨコ、ナナメの板ナデ。
12	貝石上	円筒	胴部		2.0	0.6		1.5	1～4㎜大の石英・長石粒を多く含む。	橙色	良好	表面指おさえの後浅いヨコハケ（板ナデか）。裏面は全体に指でナデまわして平滑に。
13	周堤理土	円筒	胴部		1.8	1.1		1.4	細かい白色粒と、微粒の金雲母を若干含む。	にぶい橙色	良好、硬い	表面板ナデか。裏面に指おさえ痕、工具痕有り。透孔有り。
14	周堤	円筒	胴部		2.2	0.8		1.3	1～2㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	普通、ややあまいか	表面はマメツ。裏面は強いヨコ方向の板ナデ押圧。
15	周堤	円筒	胴部		1.2	0.6		1.3	1～3㎜大の石英・長石粒を含む。	黄橙	やや軟	わずかだが円形の透孔有り。表面マメツしているがかすかなヨコ板ナデ痕有り。
16	周堤理土	円筒	胴部		2.0	0.6		1.5	1～3㎜大の石英・長石粒を多く含み、微粒の角閃石を若干含む。	表・橙色、裏・灰褐色	普通	透孔らしきもの有り。表面はマメツ。裏面は指おさえの後タテハケ→ヨコナデ。
17	周堤	円筒	胴部		2.6	0.5		1.7	1～3㎜大の石英・長石粒を多く含む。	橙色	やや軟	円形の透孔有り。裏面はタテハケがうっすらと残る。粘土のしわより、工具痕有り
18	周堤理土	円筒	胴部		2.1	0.7		1.5	1～5㎜大の石英・長石粒を若干含む。	明褐色	普通	突帯のすぐ上に円形上の透孔有り。裏面に板状工具の擦痕
19	周堤理土	円筒	胴部		2.0	0.5		1.5	1～7㎜大の長石・石英粒を含む。	明褐色	良好	表面はタテハケ。裏面は指なでの痕有り。
20	周堤	円筒	胴部		1.7	0.5		1.3	1～3㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	普通	表裏面ともかなりマメツしている。表面は板状工具でナデたか。透孔有り。
21	周堤理土	円筒	胴部		2.0	0.8		1.4	1～2㎜大の石英・長石粒、黒色粒を含む。	橙色	普通	円形状の透孔。表面はマメツしているがうっすらと細かいタテハケが見える。

22	周壕埋土	円筒	胴部		2.5	0.9		1.5	緻密。微粒の金雲母、1～3㎜大の長石・石英粒子、1㎜大の赤色粒、1～2㎜大の角閃石を若干含む。	断面・浅黄橙色、表裏・橙色	普通	下方が四角い透孔有り。表裏面ともマメツ。
23	周壕	円筒	胴部		－	－		1.3	1～2㎜大の石英・長石粒、若干の微粒の金雲母を含む。	橙色	軟	円形状の透孔有り。裏面はマメツするも指おさえ痕、工具痕有り。
24	周壕埋土	円筒	胴部		2.4	0.7		1.4	1～2㎜大の石英・長石粒、2㎜大の赤色粒、微粒の金雲母を若干含む。	橙色	良	円形状の透孔有り。裏面はマメツ。
25	周壕	円筒	胴部		2.1	0.6		1.3	1～3㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	良好	透孔らしきものがある。裏面は浅いタテハケ→ナデ
26	周壕埋土	円筒	胴部		1.7	0.9		1.3	微粒の石英・長石粒を含む。	橙色	普通	楕円状の透孔有り。裏面は強い板状工具によるヨコ方向の調整である。
27	周壕埋土	円筒	胴部		1.9	1.2		1.1	微粒の石英・長石粒、金雲母を若干含む。	明褐色	良好	表裏ともマメツしている。裏面には強い指おさえ痕、うっすらとしたヨコハケが残る。
28	周壕埋土	円筒	胴部		1.3	0.7		0.9	精緻、微粒の白色粒、金雲母、黒色粒を若干含む。	黄橙色	あまい、軟	裏面はマメツ。
29	周壕	円筒	胴部		2.6	0.6		1.2	微粒～7㎜大の大粒のガネで、石英・長石粒が若干入る。微粒の金雲母も少々。	橙色	普通	表裏面ともマメツ。表面に明瞭ではないがヨコ板ナデらしき痕有り。
30	周壕埋土	円筒	胴部		2.2	0.7		1.4	ガサつく。微粒～7㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	良好、かたい	裏面はマメツ。
31	周壕埋土	円筒	胴部		1.9	0.7		1.4	微粒の白色粒を若干含む。	橙色	良	裏面はマメツしているが、斜め方向に板ナデしたようだ。円形の透孔有りか。
32	葺石上	円筒	胴部		2.3	0.5		1.5	1～2㎜大の石英・長石粒を若干含む。	橙色	普通	表裏面ともマメツ。裏面はタテ方向のナデらしい。
33	周壕	円筒	胴部		2.0	0.6		1.4	1～2㎜大の石英・長石粒と、微粒の金雲母、1～4㎜大の赤色粒子を含む。	橙色	軟	表面はマメツ。裏面は指おさえの後タテ方向にナデている。
34	周壕	円筒	胴部		1.9	0.6		1.5	1～2㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母を含む。	橙色	普通	表面はヨコハケ、裏面はタテハケの後ヨコハケ調整を行う。
35	周壕	円筒	胴部		2.0	0.6		1.5	微粒の石英・長石粒、金雲母を多く含み、1～2㎜大の赤色粒も若干含む。	橙色	良好	表面はタテハケ→突帯部ヨコナデ。裏面はマメツ。指ナデか。
36	周壕	円筒	胴部		1.9	0.5		1.4	ザラつく。微粒の石英・長石粒、金雲母を含む。4～8㎜大の白色粒も混じる。	橙色	普通、もしくはやや軟か	表面はマメツ。裏面は細かなヨコハケ又は板ヨコナデで指おさえ痕有り。
37	周壕埋土	円筒	胴部		2.3	0.6		1.4	1～2㎜大の石英・長石粒を含む。	明褐色	良好	裏面は細かいヨコ板ナデ又は細かいハケで指おさえ痕有り。
38	周壕	円筒	胴部		1.3	0.6		1.1	精緻、微粒の白色粒を含む。	黄橙色	やや軟	表裏面ともマメツ。
39	葺石上	円筒	基底部		－	－		－	微粒の石英・長石粒を含む。	橙色	良好	底部に棒状の圧痕、ワラか木の枝状の圧痕らしきもの有り。
40	表土	円筒	基底部		－	－		－	1～2㎜大の石英・長石粒を含む。精緻。	黄橙色	良好	表面は板ナデ。裏面は指おさえ痕、板状痕有り。
41	周壕埋土	円筒	基底部		－	－		－	精緻だが、微粒～7㎜大の石英・長石粒を含む。	黄橙色	良好	表面はマメツ。裏面に指おさえ痕、板状痕有り。
1－bトレンチ												
42	周壕埋土	円筒	口縁部		－	－		1.3	微粒の金雲母、黒雲母（少）1～3㎜大の石英・長石粒も見られる。	明褐色	良好	表面は口縁部板状工具によるヨコナデ、その他はタテハケ。裏面は指押さえ後横方向の板ナデ。
43	周壕	円筒	口縁部		－	－		1.3	微粒の白色粒を若干含む。	橙色	良好	表面は指おさえ→タテハケ→口縁付近は板ヨコナデ。裏面は板ヨコナデ。
44	周壕埋土	円筒	口縁部		－	－		1.2	微粒の白色粒、金雲母を含む。	橙色	良好	表面はヨコハケ。裏面はマメツ。

図面番号	出土位置	種別	部位	現存（％）	突帯（cm） 巾	突帯（cm） 高さ	胴径当（％）	器厚（cm）	胎土	色調	焼成	備考
45	周壕	朝顔形	口縁部		2.7	1.0		1.3	金雲母、黒雲母、角閃石の微粒子若干見え、白色の微粒～3㎜大の粒子多い。2～3㎜大の茶色粒子も少し見える。	明赤褐色	普通	裏面は板状工具で斜め、ヨコ方向にナデすっている痕有り。表面に粘土のしわより。
46	周壕	朝顔形	口縁部		－	－		1.5	1～3㎜大の石英・長石粒、金雲母を含み、赤色粒も若干混じる。	明褐色	良好	裏面はマメツ。
47	周壕埋土	朝顔形	口縁部		－	－		1.4	1～3㎜大の石英・長石粒含む。金雲母の微粒子若干混じる。	明褐色	良好	表面は指おさえ→タテハケ→口縁付近は板ヨコナデ。裏面は板ヨコナデ。
48	クビレ部	朝顔形			－	－		1.3	細かい。白色粒子を若干含む。	明黄褐色	普通かやや軟	表面はマメツ（若干タテハケが見える）裏面もマメツするもヨコ板ナデらしい。
49	周壕	朝顔形	口縁部		1.9	0.9		1.6	粘土は細かいが、微粒の金雲母を若干、1～2㎜大の長石・石英粒を含み、1～5㎜大の赤色粒を含む。	橙色	普通	表面はタテハケ後指押さえ。裏面は指押さえの痕跡が残る。
50	周壕埋土	朝顔形			－	1.3		1.6	微粒の金雲母、1～2㎜大の石英・長石粒有り。	明褐色	良	表面はタテハケ→突帯部ヨコナデ。裏面は指おさえ→板状工具でヨコ、斜めにナデ、押圧。
51		朝顔形		12.0	1.8	0.6		1.6	金雲母、黒雲母の微粒子若干、1～3㎜大の石英・長石粒を若干含む。	橙色	良好	表面はマメツ。裏面に頸部を造る時しぼったあと粘土を貼り付け、ヨコに工具でナデ。
52		朝顔形		12.0	2.2	0.6		1.5	微粒の白色粒、金雲母を含む。	橙色	良好	表面はマメツ。裏面に頸部を造る時しぼったあと粘土を貼り付け、ヨコに工具でナデ。
53	周壕埋土				1.6	0.9		1.4	微粒の金雲母、黒雲母若干有り。1～2㎜大の石英・長石粒入る。	明褐色	普通	表面ヨコナデ→タテハケ。ヘラ先で押さえた痕。裏面指おさえ→粗いヨコハケ。
54	周壕埋土	朝顔形	肩部		1.8	0.7		1.2	白色微粒子（中）含む。金雲母の微粒子と1～2㎜大の赤色粒若干含む。	明褐色	普通	53と同一個体か？表面は板状工具でタテ調整の後ヨコナデ。
55	肩石	朝顔形	肩部		2.0	0.5		－	1～2㎜大の石英・長石粒を若干含む。金雲母も若干有り。	橙色	良好	表面はヨコ板ナデ。裏面は指おさえ→指ナデ。粘土のしわより、工具痕有り。
56	周壕埋土	円筒	胴部		2.2	1.0		1.8	ザラザラして粗い。1～2㎜大の石英・長石粒が多く、微粒の金雲母、黒色粒、角閃石を若干含む。	明褐色	良	透孔有り。表面はマメツするも細かいタテハケ有り。裏面はマメツのため調整不明
57	周壕埋土	円筒	胴部		2.4	0.6		1.7	1～2㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母、黒色粒を含む。	明褐色	普通	楕円状の透孔有り。表面にヘラ先のような沈線、工具痕有り。裏面はマメツ。
58	周壕埋土	円筒	突帯付近		1.9	0.6		1.4	1～3㎜大の石英・長石粒を多く含む。微粒の金雲母。角閃石も若干有り。1～3㎜大の茶色粒子もあり	橙色	普通、ややあまい	透孔有り。表裏面ともマメツ。
59	周壕埋土	円筒	胴部		1.5 / 1.9	0.7	24.4	1.6	細かい。1～5㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母を若干含む。2～3㎜大の茶色粒子も見られる。	橙色	普通	2ヶ所に円形状の透孔有り。表面はマメツ。裏面はタテ方向に指ナデ。工具痕有り
60	周壕埋土	円筒	胴部		1.5	0.7	27.6	1.8	1～3㎜大の長石・石英粒子多し。微粒の金雲母有るが、少なめ。3㎜大の赤色粒も見られる。	橙色	良好	透孔有り。表面は細かいタテハケ。
61	周壕埋土	円筒	胴部		1.5	0.7	26.7	1.5	1～2㎜大の長石・石英粒を多く含み、微粒の金雲母若干有り。	明褐色	良好	表面はタテハケと板ヨコナデ。裏面には粘土をひきずったしわより有り。
62	周壕埋土	円筒	胴部		1.4	0.8	23.6	1.3	精緻。粉っぽい。微粒の白色粒を若干含む。	黄橙色	あまい	円形状の透孔有り。表面はうっすらとタテハケが見える。裏面はマメツ。
63	周壕埋土	円筒	胴部		1.7	0.7	20.7	1.7	1～4㎜大の石英・長石粒を多く含む。1～2㎜大の茶色粒子、微粒の金雲母若干有り。	明褐色	良好	円形の透孔有り。表面はヘラ状工具でヨコナデ。裏面は斜めに指ナデ。
64	周壕	円筒	胴部		1.8	0.8	24.6	1.8	1～2㎜大の石英・長石粒多し。	明褐色	良好	2ヶ所に円形らしい透孔有り。裏面はケズリ→ヨコ、斜め方向に板状工具で調整。
65	周壕	円筒	胴部		1.8	0.9	25.6	1.2	微粒の金雲母若干有り。1㎜大の石英・長石粒を多く含む。	明赤褐色	良好	透孔付き。裏面はヨコハケ又はヨコ板ナデ。
66	くびれ部	円筒	胴部		1.9	1.0	25.6	1.7	1～2㎜大の石英・長石粒を多く含み、ガサつく。微粒の金雲母若干有り。	橙色	良好	円形の透孔有り。裏面はマメツが著しいが指おさえ痕有り。

67	周壕	円筒	胴部		1.5	0.9	24.8	0.9	1～8㎜大の石英・長石粒を含む。微粒の金雲母若干含む。	明褐色	良好	円形の透孔有り。裏面に粘土がふくれた、板で押圧したような痕がある。
68	周壕理土	円筒	胴部		3.0	－	23.8	1.3	1～6㎜大の石英・長石粒を多く含む。金雲母の微粒子若干有り。1～2㎜大の茶色粒子も若干有り。	橙色	普通、ややあまい	円形の透孔有り。表裏面ともマメツ。裏面に粘土を接合したような痕がある。
69	周壕理土	円筒	胴部		1.5	0.6	22.0	1.6	1～6㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母を含む。	にぶい黄橙色	普通	表面はマメツ。裏面は指ナデ。
70	周壕理土	円筒	胴部		1.8	1.0		0.8	1～2㎜大の石英・長石粒を多く含む。	明赤褐色	良好	表面はタテハケ→ヨコ板ナデ。裏面はヨコハケ後板状工具でヨコナデした部分あり。
71	クビレ部	円筒	胴部		2.0	1.0		1.8	1～2㎜大の石英・長石粒を多く含む。黒雲母、金雲母の微粒子を若干含む。	橙色	良好	透孔有り。表面は指おさえ→板状工具でヨコ、斜め方向にナデている。
72	暗褐色土群石	円筒	胴部		1.7	0.6		1.3	精緻、1～5㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母、5㎜大の赤色粒を含む。	黄橙色	普通	表面はマメツ。裏面は指ナデ、工具痕、ケズリ痕有り。
73	周壕	円筒			2.0	0.7		1.6	金雲母の微粒子と1～5㎜大の透明白色粒を多く含む。1～2㎜大の黒色粒若干有り。	明赤褐色	普通	透孔有り。
74	周壕理土	円筒	胴部		2.0	－		1.4	1～3㎜大の石英・長石粒を含む	橙色	普通、ややあまい	表面にかすかに板ヨコナデの条痕が残っている。
75	周壕理土	円筒	胴部		－	－		1.4	細かいが、1～5㎜大の石英・長石粒を若干含む。	黄橙色	やや軟	四角形の透孔らしきものの有り。表面はマメツ。裏面は細かいタテハケ→ナデ。
76	黒色粘質土（壁拡張区）	円筒	胴部		1.9	－		1.9	1～2㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母を含む。	明褐色	良好	円形状の透孔有り。表面に細かいタテハケ。
77・	周壕	円筒	胴部		2.2	0.8		1.3	微粒の白色粒を含む。金雲母も若干有り。	明褐色	良	表面はマメツするもかすかにタテハケが残る。裏面は板ヨコナデ。
78	周壕理土	円筒			1.8	－		1.7	ザラつく。微粒の石英・長石粒（7㎜大のものも含まれる）と金雲母を含む。	橙色	やや軟	表面はマメツ。調整工具痕有り。裏面はナデで、何かの工具痕が有る。
79	周壕理土	円筒	胴部		1.7	－		1.3	精緻。粉っぽい。微粒の白色粒を若干含む。微粒～7㎜大の石英・長石粒も若干含む	黄橙色	あまい　粉っぽい	表面は部分的にヨコハケが残っている。裏面はマメツが著しいが指ナデらしい。
80	周壕理土	円筒	胴部		2.0	0.8		1.5	1～2㎜大の石英・長石粒を含む。微粒の金雲母も若干見られる。	橙色	良好	表面は細かいタテハケ。裏面はナデ。
81	周壕	円筒	胴部		2.2	－		1.2	微粒の石英・長石粒を含む。	橙色	普通	表面はマメツ。裏面にはヨコ、斜めのハケ。
82	周壕	円筒	胴部		2.3	0.6		1.4	1～3㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	普通	表面マメツするが、部分的に浅いタテ、ヨコ、斜めのハケ。裏面にも同様の細かいハケ
83	周壕理土	円筒	胴部		1.9	0.6		1.3	1～3㎜大の石英・長石粒と金雲母を若干含む。	にぶい褐色	良	表面浅くうっすらとしたタテハケ→ヨコナデ。裏面はマメツが著しい。
84	周壕理土	円筒			2.1	0.7		1.7	微粒の石英・長石粒と金雲母を含む。	明褐色	良好、かたい	表面は部分的にヨコハケが、裏面は部分的にタテハケと粘土のしわが見られる。
85	周壕	円筒	胴部		1.7	0.6		1.1	精緻。1～3㎜大の石英・長石粒、微粒の金雲母を含む。他に1～3㎜大の赤色粒を若干含む。	黄橙色	ややあまい	表面はマメツしているが、ヨコ板ナデか。裏面はタテ板ナデ。（浅いハケ目見える）
86	周壕	円筒	基底部		2.0	－		1.6	細粒～10㎜大の石英粒子多数。1～2㎜大の赤色粒子若干有り。金雲母の微粒子も含む。粘土・普通	明赤褐色	ややあまい	器高（残存高）12.5㎝　表面不明瞭だがタテハケか。底に棒状痕有り。
87	周壕	円筒	基底部		－	－		－	細粒～10㎜大の石英粒子多数。1～2㎜大の赤色粒子若干有り。金雲母の微粒子も含む。	明赤褐色	ややあまい	表面はマメツするもかすかにタテハケが見える。裏面は斜面板ナデ。
2トレンチ												
88	周壕	円筒	口縁部		1.6	－		1.8	精緻。1～2㎜大の白色粒、1～2㎜大の茶色粒子を含む。	黄橙色	やや軟	表面に工具痕、粗いヨコハケ、指おさえ痕有り。裏面はマメツ。
89	周壕	円筒	口縁		－	－		1.2	精緻。1～4㎜大の石英・長石粒を含む。	橙色	やや軟	表裏面ともマメツ。

図面番号	出土位置	種別	部位	現存（度）	突帯（cm）		刷出面（度）	厚さ（cm）	胎土	色調	焼成	備考
					巾	高さ						
90	周壕	朝顔形	胴部		1.5	0.6		1.6	細かい、微粒の白色粒を若干含む。	黄橙色	軟	表裏面ともマメツ。
91	周壕	円筒	胴部		2.0	0.4		1.2	細かくザラつく。微粒～5mm大の石英・長石粒を含む。1～2mm大の茶色粒子や微粒の金雲母も含む。	基橙色	軟	表面はマメツ。裏面に粗いヨコハケ。
92	周壕	円筒	胴部		1.6	0.6		1.4	1～5mm大の砂粒を含む。（石英・長石、その他の石）微粒の金雲母、黒雲母も若干有り。	明褐色	良好、かたい	表裏に粗いタテハケ突帯（タガ）の下すぐ円形の大きな透孔有り。
93	周壕	円筒	胴部		1.7	0.7	18.8 / 36.4	1.3	ガサつく。1～2mm大の石英・長石粒と微粒の金雲母、黒雲母を含む。	明褐色	普通	表裏ともマメツするが、表面には板状工具の端痕が若干有る。
94	周壕	円筒	胴部		2.0	－		1.4				
95	周壕	円筒	胴部		2.3	0.8		1.3	1～6mm大の石英・長石粒、微粒の金雲母、黒雲母を若干含む。	明褐色	普通	表面はマメツ。裏面はヨコ板ナデのようだが、かすかではっきりしない。
96	周壕埋土	円筒	胴部		2.1	－		1.3	1～2mm大の石英・長石粒を多く含む。	明褐色	普通	表面にうすいヨコハケ。裏面はマメツ。
97	周壕埋土	円筒	胴部		1.7	0.8		1.5	1～2mm大の石英・長石粒を含む。微粒の金雲母若干有り。	明褐色	普通	表面に粗いヨコハケ。裏面はマメツ。
98	周壕埋土	円筒	胴部		1.6	0.7		1.3	ガサつく。1～4mm大の石英・長石粒を多く含み、微粒の金雲母も若干見られる。	明褐色	あまい	表裏面ともマメツ。
ヘラ記号形象埴輪												
99	周壕	埴輪	胴部		1.8	1.0	28.2	1.8	ガサつく。1～6mm大の石英・長石粒多い。微粒の金雲母若干含む。	橙色	良好	同心円のヘラ記号あり。透孔有り。表面タテハケ、裏面指押さえ後ヨコハケ、ナデ消し。
100	周壕	埴輪	胴部		1.8	－		1.5	ガサつく。1～5mm大の石英・長石粒を多く含む。微粒の金雲母、角閃石も若干含む。	橙色	ややあまい	表面にヘラ先による線刻有り。かなり深い刻み。
101	周壕	埴輪	胴部		－	－		1.2	細かい白色、黒色微粒子を含む。	明褐色	普通	表面タテハケ、ヘラによる長い円形の文様。裏面は指おさえ→タテハケ
102	周壕埋土	埴輪	胴部		－	－		1.5	1～3mm大の石英・長石粒を含む。	明赤褐色	良好	表面はヨコ板ナデで線刻有り。裏面はマメツしているが指おさえと板ナデらしい。
103	周壕埋土	埴輪	胴部		－	－		1.4	1～2mm大の白色粒を多く含む。	明赤褐色	普通	表面はマメツ。裏面もマメツしているがヨコハケがあるように見える。
104	周壕埋土	埴輪			－	－		1.3	精緻。微粒の白色粒、金雲母を若干含む。	明褐色	普通	表裏面ともマメツ。表面に細いヘラ先で線刻を描く。丸い文様か？
105	表土	家形埴輪？	屋根部分？		－	－		－	微粒の金雲母若干有り。微粒～5mm大の白色粒、微粒の黒色粒を含み、茶色粒子も少し見える。	橙色	普通	表面に若干のハケ目。うっすらと線がみえるがキズか意図的なものかはわからない。
106	周壕	埴輪（形象か？）			－	－		－	ザラつく。1～4mm大の石英・長石粒、微粒の金雲母を多く含む。	橙色	ややあまい	表裏面ともマメツ。

Ⅳ. まとめ

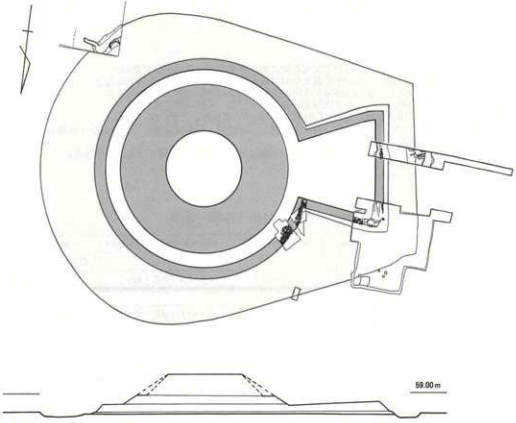
(1) 墳丘形態の復元

調査の結果から銭瓶塚古墳の墳丘形態、規模について復元を試みたい。

後円部の直径は、1－aトレンチの基底石が描く円弧のラインから、後円部が真円であると想定して直径を求めている。また、後円部の段築に関しては墳丘測量図から2段目テラスと捉えうる平坦面が認められないことから2段築成と考えられるが、墳丘表面に露呈している葺石の並びから、現段階では3段築成の可能性も想定しておきたい。後円部の形態としては、1段目テラス部分がかなり幅広い形態となっている。前方部は調査の結果1段築成部分までしか確認できなかった。今回の調査で、前方部と周壕のラインが確認されたため、主軸に直交するラインが復元できることから主軸の方向線が設定できる。この方向線が後円部で復元した円の中心を通るラインで墳丘主軸の想定を行った。この主軸を基準にクビレ部、前方部、周壕のラインを反転させて全体の形態を復元した（第19図）。

古墳の規模は、周壕を含めると復元全長62.1m、墳丘長48.3m、後円部径36m、前方部長12.3m、クビレ幅12.9m、推定高（後円基底部からの高さ）5.3mを測る。前方部の推定高は、現況で1.9mだが、削平を考慮して約2.0～2.5mと想定した。主軸はN80°W方向に向いている。

また、葺石の配列については、後円部の残存状態が良好な範囲で積み上げの単位が認められなかった。これまで葺石が確認された、近隣の古墳（丸隈山古墳、鋤崎古墳ほか今宿、飯氏地区の前方後円墳）でも、区画石等の配置は見られないことから旧糸島地域の施行方法の傾向と考えられる。



第19図　銭瓶塚古墳墳丘想定図（1／600）

(2) 古墳の築造時期

今回出土した円筒埴輪と朝顔形埴輪の特徴をまとめる。

1．円筒埴輪はすべて無黒斑である。

2．透孔は円形透孔が一般的である。透孔最下段は2段目である。

3．二次調整のヨコハケが施されているものは約1割程度で、比較的丁寧に施している。

4．直径は20cm台で、器壁は1.2～1.8cm内外である。

5．突帯はやや細めの高さのあるしっかりした断面台形である。突帯間の間隔は7cm台が多い。

近隣の前方後円墳等から出土した埴輪の特徴を以下の表にまとめてみた。

銭瓶塚古墳の造営時期は、無黒班であることから釜塚古墳より後出し、須恵器の出土が現在のところみられず、円筒埴輪の小型化もワレ塚に比べると進んでいないことから、ワレ塚古墳に比べると古い位置におさえられる。よって、5世紀中葉頃の築造と捉えたい。今回の調査で、曽根丘陵上の古墳群は、狐塚古墳、銭瓶塚古墳、ワレ塚古墳の順に造営されたことが再確認できた。

糸島地域の円筒埴輪については、これまで二次調整のヨコハケが確認されない例が多く時期指標が少なかったが、今回、近隣の古墳出土円筒埴輪の観察から円筒埴輪の小型化に伴い突帯間の幅が狭くなる傾向がみられた他、従来指摘されている指標ではあるが、時期が下るにつれ突帯の高さは低く幅広いへと変化するなどの傾向が数値的にも認められた。これらの埴輪の観察からみると、従来銭瓶塚古墳に後出すると考えられていた兜塚古墳については、口縁の形態、器面調整等からも同時期ないしはやや古い段階に促えうる。総合的な検討が必要ではあるが、埴輪からみた所見としておさえておきたい。

円筒埴輪の編年において今回検討をおこなった突帯の高さについては、古墳ごとに異なるとして編年指標にはとり入れられない傾向もあるため、今後、資料の増加を持って糸島地域の埴輪編年を検討していきたい。

（参考文献）

① 野田純子　2000　『神在横畠古墳』　前原市文化財調査報告書第71集　前原市教育委員会

② 杉山富雄編　2002　『鷸崎古墳』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集　福岡市教育委員会

③ 杉山富雄　1996　『兜塚古墳』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集　福岡市教育委員会

④ 岡部裕俊　2003　『釜塚古墳』　前原市文化財調査報告書第81集　前原市教育委員会

⑤ 高橋　徹　1986　「2．埴輪の種類と変遷」『古墳文化の研究　Ⅲ埴輪』　雄山閣

⑥ 竹中克繁　2003　「九州における埴輪生産の需要と展開」　『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回　埋蔵文化財研究集会

⑦ 岸本　圭　2000　「九州における埴輪生産の窯焼成導入以降の埴輪の展開」『九州の埴輪その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会

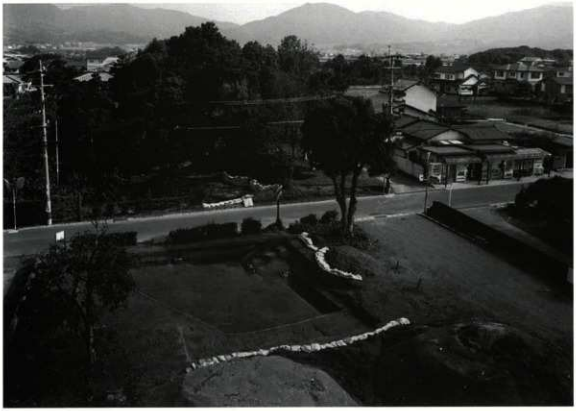
⑧ 第27回九州古墳時代研究会　2001　『糸島の古墳』

糸島地方の円筒埴輪出土古墳一覧表

古墳名	黒斑	最下段透孔	透孔形状	突帯間の平均幅	突帯の高さと形状（平均）	備　　考
三雲築山	○	－	－	－	－	前方後円墳、3期
鷸崎	○	○	半円、三角	12.4～13.3	1.2～1.4（台形・M字）	前方後円墳、4期
井田原開	○	○	半円？三角	－	1.0～1.4（台形）	前方後円墳、4期
丸隈山	○	○	半円、三角	13.4	1.4～1.6（台形・M字）	前方後円墳、5期
神在横畠	○	×	円	11.4	0.7～1.0（台形・M字）	円墳、6期
釜塚	○	×	円	－	0.8～1.0（台形）	円墳、6期
兜塚	×	○	円	9.4～10.0	0.7～0.9（台形）	前方後円墳、6期
銭瓶塚	×	×	円、方形？	7.2～9.5	0.5～0.9（台形）	前方後円墳、4期
ワレ塚	×	×	円、楕円	6.3～6.7	0.6～0.9（台形）	前方後円墳、7～8期
今宿大塚	×	×	円			前方後円墳、9期

※時期は前方後円墳編成の時期区分を用いている。

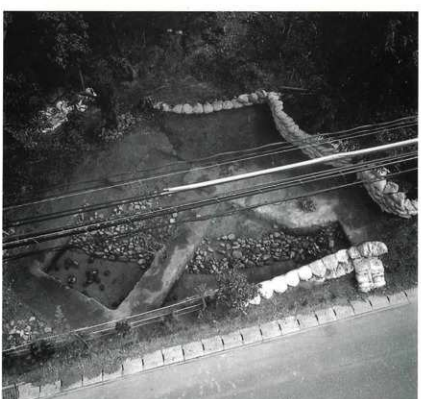
图　版



1．銭瓶塚古墳俯瞰（西から）

2．銭瓶塚古墳全体（真上から）

1．1・2トレンチ（西から）



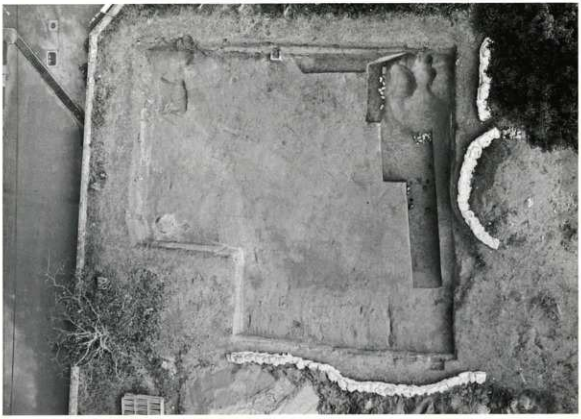
2．1トレンチ（真上から）

1．クビレ部（墳丘側から）

2．クビレ部葺石（北側周壕内から）

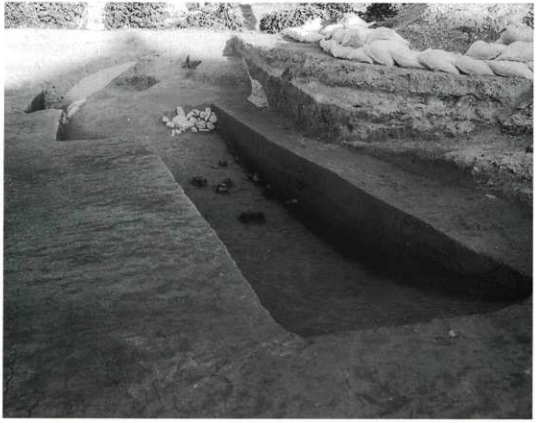
1．1－aトレンチ土層断面（南壁）

2．1－bトレンチ土層断面（西壁）



1．2トレンチ全体（西から）

2．2トレンチ土層断面（南壁）



1．前方部葺石

2．前方部から後円部（西から）

1．家形埴輪

側面(1)

側面(2)

正面

屋根部分

1．岩偶

2．1－ａトレンチ出土円筒埴輪①

1．1－aトレンチ出土円筒埴輪②

2．1－bトレンチ出土円筒埴輪①

59

66

61

67

63

86

64

87

65

1．1－bトレンチ出土円筒埴輪②

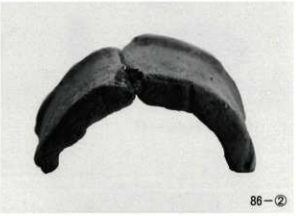
24

87

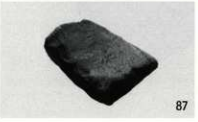
25

86－①

42


86－②

46


87

61

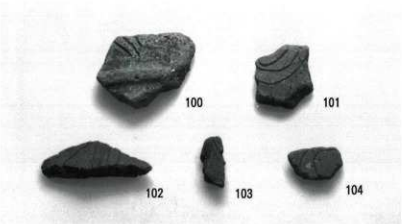
1．円筒埴輪器面調整詳細

88

91

92

1．2トレンチ出土遺物



2．ヘラ記号付埴輪破片一括

99

3．ヘラ記号付円筒埴輪

105

4．形象埴輪片①

106

5．形象埴輪片②

報 告 書 抄 録

ふりがな	くにしていしせき　そねいせきぐん　ぜにかめづかこふん							
書　　名	国指定史跡　曽根遺跡群　銭瓶塚古墳							
副 書 名	福岡県前原市大字曽根所在前方後円墳の発掘調査報告書							
巻　　次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	牟田　華代子							
編集機関	前原市教育委員会							
所 在 地	〒819-1117　福岡県前原市前原西一丁目８番14号							
発行年月日	西暦２００５年３月３１日							
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕　伊都国歴史博物館							
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原916番地							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
銭瓶塚古墳	福岡県前原市大字曽根	40222		33°31′57″	130°14′02″	2003.10～2003.12	140m²	重要遺構確認
所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
銭瓶塚古墳	墳　墓	古墳時代中期	前方後円墳		円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、岩偶			

国指定史跡　曽根遺跡群

銭瓶塚古墳

福岡県前原市大字曽根所在前方後円墳の発掘調査報告書
前原市文化財調査報告書　第87集

2005年3月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL　092－323－1111

印　刷　㈱津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16－8
TEL　092－821－0173　FAX　092－831－3329